
剣の世界の銃使い

疾輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣の世界の銃使い

【Zコード】

Z2655V

【作者名】

疾輝

【あらすじ】

この小説はソードアートオンラインの2次創作です。
原作にオリ主を入れた小説で、基本的に原作を乗っ取ります。
主人公は強めに設定されているので、チートっぽくなるかもしれません、そこはご了承ください。

やっぱ、最初はプロローグからだよね

無限の蒼穹に浮かぶ巨大な石と鉄の城。それがこの世界のすべてだ。職人クラスの醉狂な一団がひと月がかりで測量したところ、基部フロアの直径はおよそ十キロメートル、その上に無慮百に及ぶ階層が積み重なっているというのだから、荒漠とした広さは想像を絶する。総データ量などとても推し量ることが出来ない。

内部にはいくつかの都市と多くの小規模の街や村、森と草原、湖までが存在する。上へのフロアを繋ぐ階段は各層に一つのみ、そのすべてが怪物のつらつく危険な迷宮区画に存在するため発見も踏破も困難だが、一度誰かが突破して上層の都市に辿り着けばそこと下層の各都市の《転移門》が連結されるため誰もが自由に移動できるようになる。

そのようにしてこの巨城は、二年の長きに渡つてゆっくりと攻略されてきた。現在の最前線は第七十四層。

城の名は《aignクラッシュ》。約六千もの人間を飲み込んで浮かび続ける剣と戦闘の世界。

またの名を

『ソードアート・オンライン』。

「おっ、いたいた・・・」

俺はお目当てのモンスターを発見した。100メートル以上離れた先に、一匹のモンスターが佇んでいる。

モンスターの名前はブルーサラマンダー。このエリアではレベルも

高く、滅多に出現しないモンスターだ。そのため、奴から出るアイテムや素材は貴重でプレイヤーたちから重宝がられていた。しかし、逃げ足が早いため、エンカウントできる可能性はかなり低い。簡単に言つと、素材版のはぐれメタルだ。

見つけたはいいが、このまま正面から突っ込んで行つても、逃げられるだけだろう。

だが、俺には奴に気づかれず一撃で倒すことができる。

周りを見渡して、周囲に他のプレイヤーがないことを確認してから、右手を振りメニュー・ウインドウを呼び出す。

アイテムリストから、一つを選んで装備フィギュアにスクロールする。そして、スキルウインドウを開き、武器スキルを変更。ここまで操作したところで、腕に新たな重みが加わる。まず、目に付くのは燃える様な紅くれない。紅をを基調とした色合いで、黒や白で細部が色付けされている・・・

『銃』だ。

銘は『クリムゾンフレア』、銃の中でも大型のスナイパーライフル。『剣がプレイヤーを象徴する世界』を完全に壊す、俺のユニークスキルだ。

出現の条件がはつきり判明していない武器スキル、ランダム条件ではとさえ言われている、それが『エクストラスキル』と呼ばれるものだ。さらに、十数種類知られているエクストラスキルのほとんどは最低でも十人以上が習得に成功しているが、習得者が一人しかいないエクストラスキルを『ユニークスキル』という。

今まで発見されて世間に広まっているユニークスキルは、とある有名人の『神聖剣』だけだ。

銃を構え、取り付けてあるスコープを覗く。狙いは頭、照準を頭に合わせると引き金を引く。

ズドン

銃声が鳴り響き、弾は寸分違わずブルーサラマンダーの頭に吸い込まれていく。

ドスツ

弾が狙いどおり命中し、2度田の首が鳴る。その瞬間、ガラス塊を割り碎くような大音響と共に、微細なポリゴンの欠片となって爆散した。

完全に消滅したのを確認し、もう一度左手を振る。アイテムリストに素材が入っているのを見てから、銃を仕舞う。

できるだけ銃は隠しておきたい。下手にプレイヤービームに見つかって騒がれたら堪ったもんじゃないからな。

「さてと、帰りますかね・・・

そう言って、転移門に向つて歩き始めた。

全てはあの時始まつた・・・・

やっぱ、最初はプロローグからだよね（後書き）

いつも、疾輝です。

まだまだ未熟ですが、これからよろしくお願ひします。

あと、小説内に銃が出ますが、作者は余り銃について詳しく述べないので、そのところは目を瞑つてもらえるとありがたいです。誤字・脱字、感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願ひします。

人物紹介（前書き）

今回は人物紹介です。と言つても、まだ一人しかオリキャラ出す予定ありませんけど・・・
とりあえずどうぞ！

人物紹介

名前：長谷川 玲樹

ログイン名：レイト

二つ名：臆病な殺戮者

スキル：銃火器、短剣、投劍、武器製造など

説明

黒髪で整った顔立ちの14歳。ひょんな事からユニークスキル、銃火器を手に入れる。主武器は銃を使うが、他のプレイヤーに見せるのを嫌っているため普段は短剣を使っている。二つ名は短剣を使っている時の戦闘スタイルからそう呼ばれている。

攻略組の一人ではあるが、ギルドに入らずソロで活動している。また、“楽しむ”事を重要視してるので、そこまで攻略に熱心ではない。

ちなみに使っている銃は全て自作。

人物紹介（後書き）

短すぎましたね、はい。

今日はもう1話投稿しますので、是非読んでください。

誤字・脱字、感想・アドバイス等何かありましたらよろしくお願いします。

『JELLY』は樂しいゲームだった（前書き）

3話目です。
では、どうぞ！

「VRMMOでは楽しいゲームだった

「ほんと、完成度高いよな」

「こ」は第一層の主街区、始まりの町。

ファンタジーゲームの代名詞でお馴染み、中世ヨーロッパ風のレンガと木で造られた建築物が大通りから裏通りの細い路地まで軒を連ね、裏路地や店の中まで細かく作られている。

今も目の前では沢山のプレイヤーが行きかっている。今日から正式サービスが開始された『ソードアートオンライン』だつたが、さすが期待のVRMMO、ログインしている人の数は半端ない。

「いやって見ると現実と変わらないよな」

手の感覚、話すときの表情、足の裏に伝わる石の感触。どれをとっても現実で感じているものと変わりない。唯一、今始まりの町にかかるているBGMと見上げた時に見える上の層が「こ」が現実世界ではないということを示している。

それも、アーガス社が開発した、「ナーヴギア」と言ひへしドギアをつけることで「フルダイブ」と呼ばれる状態に入ったプレイヤーは、現実世界の自分の肉体から抜け出し、この世界での肉体を持つことになる。簡単に言うと、現実の世界で自分の脳から身体へと送り出された電気信号がナーヴギアによって脊髄に伝わる前に延髄でデジタル信号に変えられて、現実の身体の代わりにこの世界での自分の身体を動かすのだ。そのため、現実世界の体はベットの上で寝たきりになっている。

「さてと、一回現実に戻りますか」

リアル

ほとんどのプレイヤーが、ログインしてすぐにフィールドに向い、“自分の体”でのモンスターとの戦闘を楽しみに行つたが、レイトはまず街を探索してみようと始まりの街に残り、店の場所から細い裏路地まで街の全てを歩き回つた。そして、一通り終わつたので一度ログアウトしようかと思つたのだが・・・

「?、ログアウトボタンが無い?」

ウイングドウを開き、一番下の『LOG OUT』、つまりこの世界からの離脱を行うためのボタンがあつた、はずだった。位置を間違えたのかと思い、もう一度ウイングドウの隅から隅まで探したが、やはり見当たらない。

早速運営側がミスしたなどと考へつつ、初めてログインしたときに入る中央広場に向つてみた。すると、次々とプレイヤーたちが青い光の柱に包まれて転送されてくる。ここまで統制が取れてプレイヤーたちが転移してくるわけが無いので、運営側の強制転移ということになる。

近づいてみると、どうやら皆同じ事を考へていたらしく、「これでログアウトできるのか」や「ひとつとここから出してくれ」などと口々に言つてこむ。その間にも転送してくるプレイヤーは増え続ける。

次第にプレイヤーたちはだんだん苛立つてきたようで、「ふざけんな」だの「やつせどしる」だのと言つた暴力的な言葉も出始めた。と、転送されてくるプレイヤーがいなくなる。つまり、全てのプレイヤーが今この中央広場に集まつたというわけだ。

そして唐突に誰かが「あつ・・・・上を見る…」と言つた事で、皆が上を向き、広場は静かになった。

【Warning】

【System Announcement】

俺達の頭上には真っ赤なフォントでそんな文字が表示されていた。システムを管理する運営側からのアナウンスが始まることを示している。皆がこれで戻れると、そう思った。

そしてそんな皆の予想は、綺麗に裏切られる事になる。全面的に悪い意味で。

『ソードアートオンライン』が楽しい非現実ゲームだったのはこのときまでだった。

IRIでは楽しいゲームだった（後書き）

次回から長い長い説明会になります。
多分3話くらい使うと思うので・・・
感想とか待ってます！！

作成者からの説明会（前書き）

無理やり茅場さんの説明会を一つにまとめて見ました。
原作読んでない方には分かりにくいかもしれません。
ではどうぞ！

作成者からの説明会

真っ赤なフォントで文字が表示された後、身長20メートルあらうかという、真紅のロープを纏つた顔無しの人の姿が突如出現した。そして、低く、良く通る男の声が、頭上から降り注いだ。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

は？私の世界だと・・・・？

俺はロープがいつた事が理解できなかつた。運営側ならまず説明があるだろ？それにあんたは誰なんだ？そんな俺の疑問はすぐに消え去る。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ』

なつ・・・茅場だと・・・・

天才ゲームデザイナーで量子物理学者にしてナーヴギアの基礎設計者、それが茅場晶彦。そもそもこのS A Oは実質茅場が作った物であり、さらに彼は極力人前に出ることを嫌っていたはずだ。

『プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う。しかしゲームの不具合ではない。繰り返す。これは不具合ではなく、『ソードアート・オンライン』本来の仕様である』

仕様？仕様って何のことだよ・・・・・

俺の思考が理解する前に再び茅場の声が響く。

『諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームから自発的にログアウトすることはできない』

『・・・また、外部の人間の手による、ナーヴギアの停止あるいは解除も有り得ない。もしそれが試みられた場合』

ここでわずかな間が開き、そして。

『ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

生命活動の停止？つまりそれは・・・死ぬってことか・・・？その時、俺はナーヴギアの構造を思い出した。あれには大容量のバッテリーが内部に埋め込んであり、その出力があれば人間の脳を焼き尽くす事が可能だ。

つまり、茅場の言つている事は現実だという事。

その後もアナウンスは続いていったが、俺の頭には入つてこなかつた。

ログアウトは不可能、無理やり外しても死亡。そして、現実で死んだかどうかはこちらからは確認不可。

そこまで確認した所でアナウンスがまた頭に入つてくる。

『しかし、充分に留意してもらいたい。諸君にとつて《ソードアート・オンライン》は、既にただのゲームではない。もう一つの現実と言つべき存在だ。……今後、ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅し、同時に』

次に何を言つてくれるのか、俺にはもう分かつっていた。

『諸君らの脳は、ナーヴギアによつて破壊される』

分かつてはいたが、聞きたくは無かつた。

『諸君がゲームから解放される条件は、たつた一つ。先に述べたとおり、AINクラッドの最上部、第百層まで辿り着き、そこに待つ最終ボスを倒してゲームをクリアすればよい。その瞬間、生き残ったプレイヤー全員が安全にログアウトされることを保証しよう』

逆に言えば、それまではゲーム内で死亡しない限りログアウトはできない。もちろん、その場合の結果も分かつてはいたが。

『それでは、最後に、諸君にとつてこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え』

すぐにメニュー画面を開く。そのプレゼントとやらは所持品リストの一番上にあつた。

表示されていたアイテム名は、「手鏡」
すぐさまタップし、オブジェクト化させる。その名の通り手鏡が出てきた。

突然、周りに居るプレイヤーの顔が白い光に包まれ、俺の視界も同じようにホワイトアウトする。

視界がもどるとそこには、先程とは違う容姿、それも現実世界にいるような顔のプレイヤーたちが立つていた。ん？現実・・・・？俺は茅場のしたことを理解した。つまり、ナーヴギアの信号素子によるスキヤニングなどを使って、現実世界の顔や身体を再現したのだろう。俺も確認したが自分の顔になつていてる。
これで、もうSAOが現実であると認識せざるを得なくなつた。
しかし、まだ疑問は残る。

「なぜ、こんなことをする?」

俺の呟きを聞きとめたかのよつて、茅場の声が降り注いだ。

『諸君は今、なぜ、と思っているだろつ。何故私は S A O 及びナーヴギア開発者の茅場晶彦はこんなことをしたのか?これは大規模なテロなのか?あるいは身代金目的の誘拐事件なのか?と

違う テロならば、こんなゲームばかり閉じ込める必要も無い。身代金もこんな回りくどいやり方をしなくても、もつと効率的にする事だつて可能だ。何が目的だ・・・・・・

『私の目的は、そのどちらでもない。それどころか、今の私は、既に一切の目的も、理由も持たない。なぜなら・・・・この状況こそが、私にとっての最終的な目標だからだ。この世界を作り出し、”観賞”するためにのみ私はナーヴギアを、S A O を造つた。そして今、全ては達成せしめられた』

一呼吸おいて、また声が響く。

『・・・以上で ソードアート・オンライン 正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の 健闘を祈る』

その言葉をいい終えた瞬間、赤ロープの姿がシステムメッセージの中に溶け込んでいき、出てきたときと同じよつに消滅した。遠くから始まりの街の B G M が聞こえてくる。そして、やつと今の状況を理解したプレイヤー集団が然るべき反応を見せた。

「嘘だろ・・・なんだよこれ、嘘だろ!」

「ふざけるなよー!出せーー!」から出せよー。」

「ほんなの困るー!」の後約束があるのよー。」

「嫌ああー帰してー帰してよおおおー!」

悲鳴。怒号。絶叫。罵声。懇願。そして咆哮。互いを罵り合つたり、その場に倒れる者もいた。当然だろう。たつた數十分でゲームプレイヤーから囚人に変えられてしまったのだから。

しかし、俺は落ち着いていた。多分、他のもの達よりすんなり、この状況を受け入れてしまつた所為だろう。

俺の思考は通常と変わらぬ程度に戻つており、これから如何すればいいのか、それを考え始めていた。

まず、この世界でも絶対に死んではいけない。そして、100層までこの城を攻略しなくては現実世界に戻れない。つまり、死なないで100層まで攻略すれば現実世界に戻れるということだ。

それは実現するのは、とてもなく難しい。そして、仮にできたとしても膨大な時間がかかるだろう。

それでも、今の俺にはいつのまにか、やつてやるという意思ができていた。そして、これに参加してしまつた以上いくら過酷なデスゲームだらうとも絶対楽しんでやうとも。

「絶対生き残つてやるぞ!」

こうして、SAOというゲームはルールは大幅に変わつたものの、再び幕を開けたのだった。

作成者からの説明会（後書き）

どうだったでしょうか？
一巻のところから始めよつか、黒の剣士のところから始めよつか迷
つてます。
感想とか待っています！！

4つのグループ（前書き）

今日はほとんど原作丸写しです。
下手に変えると訳が分からなくなるので・・・
では、どうぞ！

4つのグループ

ゲーム開始一ヶ月で一千人が死んだ。

俺が見たとおり、この世界から出られないと知ったときの皆のパニックは狂乱の一言に尽きた。わめく者、泣き出す者、中にはゲーム世界を破壊すると言つて街の石畳を掘り返そうとする者までいた。無論街はすべて破壊不能オブジェクトで、その試みは徒労に終わつたのだが。どうにか皆が現状を呑み込み、それぞれに今後の方針を考え始めるまでに数日を要したと聞く。

プレイヤーは、当初大きく四つのグループに分かれた。

まず、これが約半分を占めたのだが、茅場の出した解放条件を信じずに入部からの救助を待つた者たちだ。

気持ちは痛いほどよくわかった。自分の肉体は、現実には椅子やベッドの上でゆつたりと横たわり、呼吸している。それが本当の自分であり、この状況は仮のもので、ささいなきつかけで向こうに戻れるはずだ。確かにメニューからログアウトはできないが、内部で何か見落としたことに気付けば。

あるいは、外部では今、運営企業アーガスと、何より政府がプレイヤーを救おうと最大限の努力をしているだろう。慌てずに待つていればある日ふと自分の部屋に戻り、家族と感動の対面を果し、学校や職場で一時の話題をさらう。

そう思うのも本当に無理はなかつた。俺も自身内心の何割かではそう期待していたのだ。彼らの取つた行動は基本的に 待機。街からは一步も出ず、初期配布されたゲーム内通貨を僅かずつ使って日々の食糧を買い求め、安い宿屋で寝泊りし、何人かのグループを作つて漠然と日々を過ごしていた。

幸いはじめの街は基部フロアの面積の約二割を占め、東京の小さ

な凶ひとつほどの威容を誇っていたため五千人のプレイヤーがそれほど窮屈な思いをせず暮らせるだけのキャパシティがあつた。

だが、助けの手はいつまで待っても届かなかつた。何度も目覚めても最初に目にする光景は、常に青空ではなく陰鬱な色彩の天空の蓋だつた。初期資金も永遠に保つわけもなく、やがて彼らも何らかの行動を起こさざるを得なくなつた。

二つ目のグループは全体の約三割。三千人ほどのプレイヤーが属したのが、協力して前向きにゲームクリアを目指そうという集団だつた。リーダーとなつたのは、日本国内でも最大級のネットゲーム情報サイトの管理者だつた男だ。

彼のもと、プレイヤーはいくつかの集団にわけられて、獲得したアイテム等を共同管理し、情報を集め、上層への階段がある迷宮区の攻略に乗り出した。リーダーのグループははじまりの街の、中央広場に面した黒鉄宮を占拠し、物資を蓄積してあれやこれやと配下のプレイヤー集団に指示を飛ばしていた。

この巨大集団にはしばらく名は無かつたが、全員に共通の制服が支給されるようになつてからは、誰が呼び始めたか『軍』という笑えない呼称が与えられた。

三つ目は、これは推定で千人ほどが属したのだが、初期に無計画な浪費でコルを使い果たし、さりとてモンスターと戦つてしまつとうに稼ぐ気も起こさず、食い詰めた者達だ。

ちなみに、データの仮想世界であるSAO内部でも厳然と起つる生理的欲求が一つある。睡眠欲と食欲だ。

睡眠欲は、これは存在するのも納得が行く。脳は与えられている外界情報が現実世界のものなのか仮想世界のもののかなどということは意識していないだろうから。プレイヤーは眠くなれば街の宿屋へ行き、懐具合に応じた部屋を借りてベッドに潜り込むことになる。莫大なコルを稼げば、好みの街で自分専用の部屋を買うこともでき

るが、おいそれと貯まる額ではない。

食欲に関しては、多くのプレイヤーを不思議がらせた。現実の肉体が置かれた状況など想像したくもないが、恐らく何らかの手段で強制的に栄養を与えてもらっているのだろう。つまり、空腹感を感じてこちらで食事をしたとしても、それで現実の肉体の胃に食い物が入るわけはない。

だが、実際にはゲーム内で物を食つと空腹感は消滅し、満腹感が発生する。このへんのメカニズムはもう脳の専門家にでも聞いてもらうしかない。

逆に言えば、一度感じた空腹感は食わないかぎり消えることはない。多分、食わなくても死ぬことはないのだろうと思つ。しかしあやはりそれが耐えがたい欲求であることに変りは無く、我々は毎日NPCが経営するレストランに突撃してはデータの食い物を胃に詰め込むことになる。蛇足だがゲーム内で排泄は必要ない。現実世界でのことは、食つ方面よりも更に考えたくない。

さて、話を戻すと。

初期に金を使い果たして、寝るはともかく食つに困つたもの達のうち大半は、例の共同攻略グループこと『軍』にいやおうなく参加することになった。上の指示に従つていれば少なくとも食い物は支給されたからだ。

だが、どこの世界にも協調性など薬にしたくもないという人々が存在する。はなからグループに属するのをよしとしなかつた、あるいは問題を起こして放逐された者達は、はじまりの街のスラム地区を根城にして強盗に手を染めるようになつた。

街の中そのものはシステム的に保護されており、プレイヤーは他のプレイヤーに一切危害を加えることはできない。だが街の外はその限りではない。はぐれ者たちははぐれ者たちで徒党を組み、モンスターによるもある意味冒みがあり、危険の少ない獲物であるプレイヤーを街の外のフィールドや迷宮区で待ち伏せして襲つよつになつたのだ。

とはいえさすがの彼らも 殺し まではしなかつた 少なくとも 最初の一年は。このグループはじわじわと増加し、ゲーム開始一ヶ月で先に述べたとおり一千人に達したと推定されていた。

最後に、四つ目のグループは簡単に言ってその他の者たちだ。攻略を目指すとしても巨大グループには属さなかつたプレイヤーたちの作った ギルド があよそ五十、人数にして五百。オレたちも含めギルド所属者たちは軍にはないフットワークの良さを活かして堅実な攻略と戦力増強を行つていた。

更に、ごく少数の職人、商人クラスを選択した者たち。せいぜい二、三百人程度の数だが、彼らもまた独自のギルドを組織して、当面の生活に必要なコルを稼ぐためスキルの修行を開始した。

のこる百人たらずが、俺もここに入るが ソロプレイヤー と呼ばれた者達だ。グループに属さず、単独での行動が自己の強化、ひいては生き残りにもつとも有効であると判断した利己主義者たち。そのほとんどがベータテスト経験者だった。まあ、俺は違つたが。知識を生かしたスタートダッシュによつて短期間でレベルを上げ、單独でモンスター や強盗たちに対抗する力を得てしまつた後は、正直に言つて他のプレイヤーと共に闘するメリットはほとんどなかつたのだ。

その上、SAOというゲームは、 魔法 、つまり 必中の遠距離攻撃 が存在しないゆえに単身で複数のモンスターの相手をし易いという特徴がある。しつかりした技術さえあれば、ソロプレイのほうが経験値効率ではパーティープレイを上回る。

貴重な知識を独占し、猛烈なスピードでレベルアップしてゆくソロプレイヤーとそれ以外の者達との間には深刻な確執が発生していた。ゲームがある程度落ち着いてからは、ソロプレイヤーは皆はじまりの街を出て、より上層の街を根城にするようになつていつた。

黒鉄宮の、もとは 蘇生者の間 であったところには、ベータテス

トの時には存在しなかつた金属製の巨大な碑が設置され、その表面には一万人のプレイヤー全ての名前が刻印されていた。なんとも有難い配慮で、死亡した者の名の上にはわかりやすく横線が刻まれ、横に詳細な死亡時刻と場所、死亡原因が記されるというシステムだ。さて、軍やそれ以外の集団に属したプレイヤー、特に待機組に属した者たちが遅まきながらゲームの攻略を開始するにつれて、やはりモンスターとの戦闘で命を落とす者も現れはじめた。

SAOでの戦闘には、多少の勘と慣れが必要となる。自分で無理に動こうとせずシステムのサポートに乗っかるのがコツと言えるだろうか。

例えば、単純な片手剣上段斬りでも、片手直剣スキルを習得して剣技リストに上段斬りを備えた者が、その技をイメージしながら初期モーションを起こせば後はシステムがほぼオートでプレイヤーの身体を動かしてくれるのに対し、スキルの無い者が無理やり動きを真似ようとしても振りは遅いわ攻撃力は低いわでおおよそ実戦で使えるシロモノにはならない。つまりある意味では格闘ゲームでコマンドを出すのに似ていると言える。

が、それに馴染めない者たちは握った剣をやたらと振り回すばかりで、初期状態で習得できる基本の単発技を出していれば勝てるはずのイノシシやオオカミに遅れをとる結果となつた。それでも、HPがある程度減つた時点で戦闘に見切りをつけて離脱・逃亡していれば、死という結果を招くことはなかつたはずなのが。

スクリーンを通して2Dグラフィックの敵を攻撃するのと違い、SAOでの戦闘はその圧倒的なリアリティゆえに原始的な恐怖を呼び起こす。どう見ても本物としか思えないモンスターが凶悪な牙を剥き出して自分を殺そうと襲つてくるのだ。

ベータの時ですら戦闘でパニックを起こす者がいたというのに、現実の死が待つていているとなればなおさらだ。恐慌に陥ったプレイヤーは、技を出すことも逃げることすらも忘れ、HPをあつけなくゼロにしてしまいこの世界から永遠に退場することとなつた。

自殺。モンスター戦における敗北。すさまじい速さで増えていく無慈悲なラインを刻まれた名前たち。

その数がゲーム開始一ヶ月で一千人という恐るべき数にのぼった時、残った全プレイヤーを暗い絶望感が包み込んだ。このペースで死者者が増えつづけるなら、半年年経たないうちに一万人が全滅してしまう。百層突破など夢のまた夢だ。

だが 人間というのは慣れるものだ。

一ヶ月後と少したつた頃に第一層の迷宮区が攻略され、そのわずか十日後に第一層も突破された頃から、死者の数は目に見えて減りはじめた。生き残るための様々な情報が行き渡り、きちんと経験値を蓄積してレベルを上げていけばモンスターはそれほど恐ろしい存在ではないという認識が生まれた。

このゲームを攻略し、現実世界に戻れるかもしない。そう考えるプレイヤーの数は、少しずつ、だが着実に増えていった。

最上層は遙かに遠かつたが、かすかな希望を原動力にプレイヤー達は動きはじめ 世界は音を立てて回りだした。

4つのグループ（後書き）

ただ書き写しただけなので誤字・脱字があつたかもしません。
次は、黒の剣士からはじめようかと思います！
感想とか待っています！！

ボッタクリ店番と黒死への（前書き）

やつと、黒の剣士に入りました。
今回はあの一人との関係を書いてみました。
では、どうぞ！

ボッタクリ店主と黒沢くめ

SAOが始まってから約1年と3ヶ月が経つた。

その間にプレイヤーたちは着実にゲームに順応していき、今の最前线は第58層まで攻略していた。

ちなみに俺はレベル81。他のプレイヤーに比べると結構高い数値だ。そしてずっとソロでやつてきている。

俺はブルーサマランダーとの戦闘を終え、今借りてる宿がある第50層、アルゲードに戻ってきていた。アルゲードはSAO内では有数の大型な街であり、完結に表現すると『猥雑』の一言に限る。広大な面積いっぱいに無数の隘路が重層的に張り巡らされていて、一度迷い込むと2・3日戻って来れないとまでいわれている。

毎回、新しい街の場所が分かると俺はその街に行き、隅々まで回って立体マップを登録できる『ミラージュ・スフィア』というアイテムに細かく記していくのだが、このアルゲードは他の街の3倍も時間がかかった。

宿に戻る前にアイテムを処分しておこうと思い、馴染みの買取屋に足を向けた。程なくして一軒の店にたどり着く。この店の店主とも知り合いで、俺は大抵アイテムを処分するときはここを利用している。

中に入ると、店の中はがらんとしていた。奥にいた店主を見つけ、声をかける。

「よつす、エギル。阿漕な商売のし過ぎで客が来なくなつたか？」

店主がこちらを振り向く。

「レイトか。バカ言え、こんな朝っぱらから店に来るのはお前ぐらいしかいねーんだよ」

この店の店主、エギルと軽口を叩き合つ。百八センチはある体躯を筋肉と脂肪でがつちりと包み、その上に乗った顔は悪役レスラー並みの岩から削りだしたようで、さらに唯一カスタマイズできる髪型をつるつるのスキンヘッドにしている。それがエギルだ。

ちなみに今は午前2時である。

「大事な睡眠時間奪つて悪かつたな。まあ、いいもん持つてきたから許してくれよ」

「ま、レイトは常連さんだしな。どれどれ・・・」

俺がトレードワインドウを提示すると、エギルがそれを覗き込んだ。エギルの両目が、トレードワインドウを覗き込んだとたん驚きの色を示した。

「お~お~、これはブルーサラマンダーの素材じゃねえか。いいのか?丸」と売つちまつて

「ああ、俺はまだ装備を新調しなくてい

そこまで言つたところで、後ろの入り口が開いた。一人のプレイヤーが中に入つてくれる。

「あれ、レイトか?こんなところで会つなんて珍しいな

そう言つて入つてきたのは、黒髪の全身を黒で固めている少年だ。名前をキリストという。

俺と同じくアルゲートを拠点としていて、攻略組の一人なため、フィールドではよく会つたりする。

「俺はいつも、このくらいの時間ここに来るからな。お前もここ利用してたのか、クロノ」

「いい迷惑だ。その所為で俺は毎回起こされたるんだけどな」

エギルの店は意外と、と言ひちやいけないが結構繁盛している。そのため、他に客がいなくて、早めに用事を済ませやすい早朝にこの店に来ることにしている。ちなみに、クロノとここの店は俺がキリトにつけたあだ名で、彼の一いつ名の《黒の剣士》からとっている。

「だからクロノはやめてくれって。それで、何の取引してんだ?」

キリトも俺のトレーディングカードを覗き込んで来る。

「つむ、ブルーサラマンダーの素材かよ。よく倒せたな」

キリトもエギルと同様、驚きの表情を示す。

「あ、爪があつたらくれないか、防具に必要で」

「エギルに売るんだから、売った後にそれを買えばいいんじゃないのか?」

「いや、エギルから買ひと値段をぼつたくられるんだよな・・・」

「ああ、それは分かる」

「お前が、そういうのは本人の前で言つもんじやねえよな」

エギルが苦笑する。エギルは商人なのにもかかわらず、自己犠牲といつ言葉からはかけ離れている。

「よし乗った。というわけでスマンなエギル。爪はクロノに売るわ

「ああ、分かった。それ以外のやつだけでも、十分助かるからな」

取引を成立させ、トレードを終わらせる。俺はウインドウを開じて、店から出て行こうとした。

「この後、レイトはどうすんだ? 何も用事ないなら、これから知り合いのギルドとレベ上げに行くんだけど……」

後ろのキリトから誘いの声がかかる。しかし、俺は片手を上げて

「悪い、ちょっとやることがあるんでね」

と、断つた。これから、スキルの熟練度を上げに行くためだ。別にそれだけなら誘いに乗つてもいいのだが、俺はまだ、友人たちにもユニークスキルを見せたことが無い。そのため、このじろは全くパーティを組まずに、一人で狩るようにしている。

そのまま、店から外に出た。

ボッタクリ話せと黙黙へめ（後編）

もつねと深くキコトの説明はしたかつたけど、作者ではこれが限界ですね。

明日から、合宿に行くんで1週間くらい小説投稿とまると思います。終わったらすぐ書きますので、よろしくお願いします。

感想とか色々待っています！

少女との出来事（前書き）

お待たせしました、久しぶりの投稿です。
シリカを描写だけ出してみました。
話の中にオートスキルが出てきますが、作者の創作物です。
では、どうぞ！

今俺は、35層の北部に広がる広大な森林地域、通称『迷いの森』にいた。ここは、その名の通り、碁盤上に分割された数百のエリアで構成されており、踏み込んでから一分経つと、東西南北の隣接エリアへの連結がランダムに入れ替わってしまう仕組みになっていた。更に転移結晶も使えず、森から出るには走り抜けるか、地図を買うかなどの方法しかない。

そして何故俺がここにいるかというと、道に迷ったわけではなく、逆にこれを利用しようと考へたからだ。

一分ごとに周りのエリアが変わるため、当然いきなり真横や後ろに敵が現れることがある。それを利用して、反射神経を高めようとうわけだ。

ちなみに、俺の武器や装備も変わっている。武器は銃ではあるが、片手で持てるサイズで、銃身部分が縦に分厚くなっていて、上下には刃がついている。銃口周辺にも切り裂けるように、鋭くなっている。それが一丁。銃による近接戦闘スキル『銃火器』派生、『銃衝術』だ。

何故ユニークスキルなのに、派生まであるのかというのは、話すと長くなるので今度説明しよう。

装備も、『コート』のような朱の上衣の戦闘衣に変わっている。これは、モンスターからのドロップで毒、麻痺などの状態異常をある程度緩和できる上に、暑さ、寒さも完全に通さないという優れものだ。しかし、守備力は紙のように低いのため、使っているプレイヤーはほとんどいない。

それでも俺がこの『コート』を使っている理由は、相手からの攻撃を食らわない自信があるからだ。

それに、逆に硬い装備を身に着けていると、自分が守られているというわずかな安心を生んでしまうからだ。その安心は時に命取りに

なる。

もうここに入つて、3時間になろうとしていた。エギルの店に行つてから、一度部屋に戻つて仮眠してからここに入つたため、もう辺りは暗くなりかけている。

また一分経ち、周りのエリアが変化する。周囲に索敵スキルをかけたが、モンスターはいなかつた。

「そろそろ、帰るかな・・・」

もうスキルの熟練度も、予定していた所までは上がつたし、次のエリア変動が終わつたら帰ることにした。

程なくして時間が経ち、エリアがまた変化する。変化し終わった瞬間、前方に敵の反応を確認する。

二丁銃を構え、敵の方向へ走り出す。すぐにモンスターの姿が目に入り、名前が上に表示される。

『ドランクエイプ』、この迷いの森で出現する中で最強クラスの猿人だ。この森の中ではだが。

数は3。気づかれる前に狙いを定め、引き金を引く。

放された弾丸は、全て猿人たちの頭にのみ込まれていき、触れた瞬間残りのHPに関わらず、ポリゴンの欠片となつて粉碎した。

俺が習得しているオートスキルのおかげだ。オートスキルとは、特定のスキル熟練度が一定値に達すると、覚えられるスキルで一度習得すると、それ以降別のスキルに変更しても常に働き続けるスキルだ。

今発動したのは『ヘッドショット』。銃火器スキル熟練度が500で習得できるスキルで、銃系武器で相手の東部に当たる部分に攻撃を当てる時、一定確率で残りHPに関わらず、相手に止めを刺すことができるスキルだ。

更にこのスキルは、熟練度が上がれば上がるほど発生確率が上がるというオマケつきだ。今の俺だと、8割の確率で発生する。

ポリゴンの欠片が完全に消え去ったその時、ドランクエイプ達がいた場所に何かが近づいてくる。仕舞いかけてた銃を構え、引き金を引こうとして、突っ込んできたものが目に入る。それは、まだ幼い少女だった。辺りが見えていないようで、ものすごい勢いで一直線に突き進んでくる。

無理やり腕をそらし、弾丸の軌道を変える。ギリギリ間に合ひ、弾丸は少女のすぐ隣にあつた木に命中する。

しかし、その音で少女がこちらに気づいてしまった。
あ、しまったなどと思つたときには、もう遅かった・・・

少女との出来事（後書き）

感想とか待つてます！！

使い魔蘇生パーティ結成！（前書き）

SAO 8巻出ましたね！とても面白かったです。
今回はシリカとの会話です。
では、どうぞ！

使い魔蘇生パーティ結成！

シリカは、S A Oでは珍しい《ビーストティマー》だった。ビーストティマーとは、とても低い確率で敵モンスターを飼いならし、自分の《使い魔》として使うことができるプレイヤーのことを指す。彼女はその中でも珍しい《フェザーリドラ》という竜種のモンスターをティムしていた。

だつた。というのは、今日の冒険で些細な口論をしてしまい、迷いの森でパーティと分かれてしまった。そのため、迷いの森で迷い、《ドラゴンクエイプ》の集団に《フェザーリドラ》は、ピナと名前をつけていたのだが、殺されてしまったからだ。

ピナが消えたのを認識した瞬間、体の中で何かが切れたのを感じた。その怒りを目の前の猿人たちにぶつけようと、猛然と突っ込もうとしたのだが・・・・。

突如猿人たちがポリゴンの欠片となつて消え失せ、その後自分の真横に何かが飛んできて、横にあつた木に衝撃が起つた。驚いて、何かが飛んできた方向を向くと、朱色のコートらしきものを着た男性プレイヤーだった。

あーー、ドジった。こんな迷いの森の奥になんて、誰も来ないかなどと思つてた所為で銃これがばれてしまつた。などと思いつつ、俺はどう言い繕うか考えていた。

先に相手の出方を伺おうと思つて少女の方を見てみたが、どうにも相手の出方を伺おうとしたのだが、少女の方は今にも泣き出しそうになつている。

「あー、無事か？」

こちらから声をかけると、少女は緊張の糸が切れたようでの場にへたりと座り込んだ。

「お願いだよ……私を独りにしないでよ……ピナ……」

少女はそのまま泣き始めてしまった。何か大切な物が死んだのだろう、ピナと言うからにはプレイヤーではないのだろうが……とりあえず、少女に事情を聞いてみると、一年間ともに過ごして来た使い魔が死んでしまったそうだ。

どうしたものかと考えているとふと、視界の隅に羽のような物が入った。それを見てることを思い出した。

「四十七層に使い魔専用の蘇生アイテムがあるらしいんだが……

それを聞くと少女は立ちあがって、ずいっと顔を近づけてきた。

「ほんとですか！」

「あ、ああ。そこに使い魔の羽があるだろ、なんでも四十七層でテイマー本人が行くと採れるプネウマの花を3日以内にその羽に使うと使い魔が蘇生できるって話を聞いたことがある」

少女の顔が近づき、ドキドキしながらこの前聞いた話を言い切る。それを聞いた彼女は、喜んだもののすぐに悲痛な面持ちに戻つてしまつ。

俺はトレードウインドウを開き、余っていた装備一式をトレード欄に移す。すると不審に思ったのか、少女の方から声をかけてくる。

「あの……」

「その装備で七・ハレベ位は『まかせる。まだ少しどじかないけど、俺もいつしょに行くから多分大丈夫なはずだ」

「えつ・・・・・」

少女がこちらの方をじっと見てくる。多分俺がグリーンかどうか見てるのだろう。もちろん俺は人を殺したことは無いのでグリーンだ。それを確認し終わってまた少女が口を開いた。

「なんで・・・・そこまでしててくれるんですか・・・・?」

まあそなうなるだろ。自分が相手にこんなことを言われても、警戒心が先に立つし、そもそもアインクラッシュでは《甘い話にはウラがある》というのが常識となっている。

「笑つていて欲しいからかな」

「は?」

「いや、せつかく『A』というゲームをプレイしていくんだったら、存分に楽しもうよ。今この世界にいるんだつたら、この世界に居るときにしかできないことをやって楽しんだ方がおもしろい」

我ながらかなりクサイ台詞だと思つ。だけど、これは俺がこの『デスマゲームの中でもいつも忘れないようにしてきたことだ。すると、少女がいきなり噴き出した。

「ふつ・・・・、笑つていて欲しいからなんてクサすぎますよ。あははは」

確かに自覚はしていたはずだが、さすがに読み返されると結構ハズい。だけど少女の方に笑顔が戻った。それでよしとしようとした無理やり思い込む。

「よろしくお願ひします。助けてもらつたのに、その上こんなことまで・・・あの・・・こんななんじや、全然足らないと思つんですけど・・・」

トレーディングカードにコルが表示される。おれら少女の持つている全額なのだね。それに首を振つてから答える。

「いや、お金はいいよ。前使つてて使わなくなつたものとか、余つてたものだし。それより、一つこいつの頼みを聞いてほしいんだけど」

頼みと聞いて、少女の体がびくつと動いた。

「・・頼みですか・・・えと、なにを・・・」

「あー、君の想像してるのは違つた。これを黙つといってくれないか?」

「え?」

俺は腰に吊つた2丁の銃を指して言った。少女の方は、今まで使った魔のことと頭がいっぱいだつたようで、初めて銃に気がついたらしい。ぱちぱちと何度も瞬きしてから、答えた。

「そんなことでいいんですか?」

「ああ、俺にどうしてはかなり重要なことだからな」

「じゃあ、改めてお願ひします」

そう言つて、ペコリと頭を下げてくれる。

それを見て、ゴルをもどしてから、OKを押す。

「すみません、何からなにまで・・・。あの、あたし、シリカって
いいます」

「俺はレイド、これからよろしく」

俺はミラージュ・スフィアを取り出すと、シリカと共に出口へと歩
きだした。

使い魔蘇生パーティ結成！（後書き）

どうだったでしょうか？

レイトは現実でのキリストとの接点が無いので、こんな感じになりました。

あと、これから投稿速度が遅くなると思います、リアルでいろいろあるので・・・

これを読んでくれている皆さんは申し訳ないです。
感想とか待ってます！！

中間プレイヤーのアイテム（魔晄球）

今回もロヂコトと協力しておきました。
では、どうも！

中層プレイヤーのアイドル

俺はシリカを連れて、35層主街区まで戻つてきていた。この層自体はほのぼのとした雰囲気があるが、中層プレイヤー達の狩り場となつているため街は人で溢れていた。

俺よりもこの層に詳しいシリカに連れられて、大通りを通り転移門のある街の広場を抜ける。すると、数人のプレイヤーがこちらに話しかけてきた。当然、俺に対してではなく、シリカにだ。話を聞いてみると、シリカをパーティに誘いたいらしい。このSAOの中では、女性プレイヤーの比率は圧倒的に低い。さらに、現実リアルの顔が出てしまつていて、容姿まで整つているプレイヤーは限りなく少ない。そんなプレイヤーがパーティにいれば、士気も大幅に上がるだろう。多少熱狂的すぎる気がしないでもないが。

「あ、あの・・・お話はありがたいんですけど・・・」

シリカの方も丁寧に断つてはいるものの、若干辟易しているようだ。

「・・・しばらくはこの人とパーティを組むことになつたので・・・」

「

そこで俺に振りますか!と内心で叫びつつ、とりあえず呼ばれたので前に出る。すると、もうすっかりシリカの取り巻きとなつていたプレイヤー達の視線が、一斉に俺に集中する。それらの視線には、全く好意的な物はない。

「おい、あんた」

両手剣を装備した青年プレイヤーが高圧的な態度で話しかけてくる。

「見ない顔だけど、抜け駆けはやめてもらいたいな。俺らはずっとこの子に声をかけてるんだぜ」

俺の装備を見てたいしたことないと感じたのか、見下すように見てきたその物言いにイラッとした。敬語を使えとまでは言わんが、人を見かけだけで判断するのは具の骨頂だ。

「あのな、自分達が一番彼女の事を知っているみたいなこと言つてるけど、彼女にだつて意志があるんだよ。誰が一番声をかけたからパーティに入れるつてのは、おかしいんじゃないか？現に、彼女は四十七層に行きたがつているが、そこまで行けるのか？おまえ達は」

場が険悪なムードになりかけたところで、シリカが助け舟を出してくれた。

「あの、あたしから頼んだんです。すいません」

シリカは最後にもう一度頭を下げて、俺のコートを引っ張つてメインストリートまで俺」と引っ張つていった。プレイヤーの姿が見えなくなつたところで、俺のほうに向き直る。

「・・・す、すいません、迷惑かけちゃって」

「いや、俺は大丈夫。にしても、毎回ああなのか？だったら、人気者は大変だな」

「ただマスク代わりに誘われるだけなんです、きっと。それで、調子に乗っちゃって・・・」

「大丈夫だつて。ピナも絶対生き返るから」

そういうてやると、シリカも笑顔に戻った。

しばらく歩いていると、『風見鶏亭』と名のついている宿屋に着いた。多分シリカが泊まっている宿なのだろう。

「あ、レイトさん。ホームはどこに・・・」

「ああ、五十層のアルゲード。色々やりたいことあったから今日はもう二〇の層に泊まろうかと思ってたんだけど・・・」

「そうですか！」

シリカがうれしそうに笑う。うん、女の子は笑っているのが一番だ。注意しておぐが、ロリコンではない！！

「こここのチーズケーキが結構いけるんですよ

「へえ、後で詳しく教えてくれ」

そんな他愛の無い話をしながら宿に入ろうとする、宿の隣の道具屋から5人の集団が出てきた。

ケーキの話題で盛り上がりながらシリカが俺を引っ張る様な形で宿に近づくと、宿の隣にある道具屋から、五、六人の集団がぞろぞろと出て来た。今日、シリカと行動を共にしていたパーティだ。

その最後尾に居た女が、こちらに気づくと、シリカが顔を伏せる。知り合いいか?と思いつつもう一度見るとあちらの方から声をかけてきた。

「あら、シリカじゃない」

声をかけられ、立ち止まる。

見た瞬間顔を伏せたことから2人の関係は余りいいものではないのだろう。

「・・・どうも」

「へえーえ、森から脱出できたんだ。よかつたわね」

名前はロザリア。彼女は口の端を歪める様な、嫌な笑い方をしながら話を続けた。

「でも、今更帰つてきても遅いわよ。つこさつきアイテムの分配は終わっちゃつたわ」

「要りないって言つたはずです！　急ぎますから」

シリカは早く話を切り上げたいのだろうが、彼女がそれを許さない。シリカの肩を見て、また嫌な笑いを浮かべる。

「あら？あのトカゲ、どうしちゃつたの？」

ピナのことだろう。この世界で使い魔がティマーの近くに居ないことはありえない。つまり死んでしまったことを知つていてわざと言つているのだろう。

怒りがふつふつと湧いてくる。ビックリの純粹に楽しむことをしないのか・・・

「あらり、もしかしてえ・・・？」

「死にました・・・でも！」

シリカがロザリアをにらみつける。

「ピナは、絶対に生き返らせます！」

そう断言した彼女の瞳には強い意思がこもっていた。これなら精神的にも大丈夫だろう。

「へえ、てことは《思い出の丘》に行く気なんだ。でも、あなたのレベルで攻略できるの？」

「問題ないだろ？」

ここで割り込む。シリカの前に出てシリカを後ろのほうに隠す。

「彼女にはきちんと意思があるし、俺もついていくから大丈夫だ」

すると、ロザリアは俺の体をじろじろ眺めてからまた笑みを浮かべた。

「あんたもその子にたらしこまれた口？見たトコそんなに強そうじゃないけど」

「装備で人を判断するのはやめたほうがいいぞ。俺はお前の倍くらいのレベルはある」

「ははっ。ホラを吹くのもいい加減にしたほうがいいよ」

「行こう」

ロザリアの言葉を無視して、シリカを宿に入れ、その後に続いて宿に入る。

「ま、せいぜい頑張ってね」

そんな言葉が後ろからかけられた。

中國プレイヤーのアイドル（後編）

感想とか待つてます！！！

ひとつあるべき食事から（前書き）

総合評価が100点越えました、ありがとうございますーーー！
些細なことですがホントうれしいです。
では、どうぞ！

ついあえず食事から

『風見鶏亭』は一階がレストラン、その上が宿屋とこう形になつていた。

レイトはチェックインして来ると書つて、店の奥に歩いていく。その間に開いている席に座つて待つて居ると、すぐにレイトが戻ってきた。

シリカはさつきの事を謝ろうとい、口を開こうとするがレイトに手で制される。

ちょうどその時に、ウエイターが2つのカップを持ってきた。カップの中には水のようなものが注いだつた。

「まずは食事から。それ、飲んでみてくれ」

レイトに言われ、シリカはおずおずとカップの中の液体を一口する。すると、口の中にピリッとした感触が走る。これは、現実世界でも飲んでいた……

「これ、サイダーですかー!？」

それを聞いてレイトがにやつと笑みを浮かべる。それが肯定だとうことを示していた。もう一度飲んでみると、やはりサイダーの味だ。でも、この店のメニューは全て試してみたはずなのだが、これは飲んだことが無かつた。

「どうやって……?」

思つていたことが、口に出てしまつた。そのつぶやきを聞いて、レイトが種明かしとばかりに話す。

「ＺＵＰのレストランはボトルの持込ができるからな。それで、それは俺の自作品だ」

「自作品？」

「ああ、味覚再生エンジンを使って作ってみたやつだ。結構似た味は出てるんだが、さすがに置いておくと炭酸が抜けるってのまでは再現できないがな」

「へえー。レイトさんって料理できたんですね」

「やつてみると結構樂しいよ、毎日同じもの食べなくていいし、色々作つて楽しめるな」

レイトと話している間に、いつの間にかカップの中身が無くなつていた。懐かしい味だからつい飲み干してしまつたようだ。久しぶりの味だつたから、もう少し残しておけばよかつたか・・・

「はは、心配しなくとも、もつとあるから大丈夫だぞ。材料もレシピも覚えてるから、ホーム戻ればまた作れるしな」

顔に出ていたようだ。思わず顔の温度が上昇したのを感じた。その間に、レイトはアイテム欄からもう一本サイダーを取り出すと、シリカに注いでくれた。

「・・・なんで・・・あんな・・・意地悪いつのかな・・・」

ポツリと呟いたのをレイトが聞きとめると、顔に出していた笑みを戻す。

「シリカはＭＭＯはこれが初めてか？」

「はい・・・」

「そつか。まあ、ゲームをやると人格が変わるやつは結構居るからな。ロールプレイングって言うのも役割に成り切るって意味だしな。本来ならばって話だが・・・」

そこで一回レイトは話を区切って、もう一度続ける。

「今は皆、自分が生きているって事を証明したいだけなんだと思うんだ、俺は」

「証明？」

「ボスを倒す、アイテムを取る、人に認められる。そんなことをして自分はここに居るって事を言いたいだけなんだと思う。それが変な方向に走っちゃって、盗む、騙す、殺すなんて事をするのかもしれない。俺の考えだけどな」

「レイトさんもですか？」

「ああ、俺もそうだ。だから、俺は楽しむことで自分を証明するようにしてるんだ」

ま、適当に流してくれ、と最後に付け加えてレイトは話を終わらせる。2人とも黙りこんでいると、ウェイターがケーキを持ってくる。すると、レイトがボソッと言った。

「チーズケーキにサイダーは合わなかつたな・・・」

といあえず食事から（後書き）

レイトが何でもできるようになつて行つてる気がする・・・
感想とか待つてます！！

翌日の説明（前書き）

PVで100000アクセス越えました、ありがとうございます！
これからもよろしくお願いします。
では、どうぞ！

明日の説明

食事を終えた後、明日に備えて早めに休むことにした。レストランの上に上ると2階はずらつと客室が並んでいた。俺が部屋を探し当てる、そこは以外にもシリカが取っている部屋の隣だった。シリカとお休みを言ってから、部屋に入った。

それから1時間くらい経った今、俺はミラージュスフィアを取り出し、いろいろなことを書き込んでいた。ミラージュスフィアには一度行つた場所の立体地図を出せるだけではなく、その場所の情報などを書き込めるようになつていて。そのため今日あつたことなどを書き込んでいた。

一通り書き終わり、ミラージュスフィアを仕舞う。次に銃の整備をするために2丁の銃をアイテム欄から実体化させる。銃はまだアイツとシリカにしか見せたことが無いため、整備（スキル的には研磨だが）は自分で行つている。ちなみに、作成も俺しかできない。だから、俺のスキルスロットは作成や研磨などの職人系スキルや趣味の料理などの非戦闘スキルで半分以上埋まってる。

銃なのだが他の武器と同じように、回転研磨台の上に一定時間上げとけば耐久度が回復する。これもある事情のため詳しく作られていないからだ。ま、それは追々。

いつもの様に2丁の銃、銘は『ベガ』と『シリウス』を回転研磨台の上に乗せてると、扉に2回ノックがあつた。俺は立ち上がって、ドアの前で尋ねた。

「こんな時間に、誰だ？」

「あ、シリカです・・・」

つい1時間くらい前に分かれたばかりの少女だった。

それを聞いてから、扉を開ける。すると、チュニックを身に纏ったシリカが部屋の前にいた。彼女を部屋の中に入れてから、俺はもう一度尋ねた。

「それで、どうかしたのか？」

シリカが少し沈黙する。それから少し慌てたように言った。

「ええと、あの――よ、四十七層のこと、聞いておきたいと思つて！」

最後の方は早口になつてゐる。多分今ひとつと考えたのだろう。ん、分かつた、と言つてシリカを椅子に座らせると、ベットに座つてさつき仕舞つたばかりのミラー・ジュースファを取り出す。小さな水晶球を見て、シリカが目をぱつぱつさせていく。

「きれい・・・それ、迷いの森抜ける時も使ってましたけど、何ですか？」

「ミラー・ジュースファっていうアイテム。一度行つた場所のマップを出せるから、地図よりも役に立つんだ」

そういうつて、四十七層の立体マップを出現させる。それを見てシリカが夢中で覗き込む。

「うわあ・・・！」

「これが主街区でここが明日行く思い出の丘だ。この道を通つていくんだが、ここの中のモンスターが少しレベル高いから注意した方がいい

い。あとは、そうだな……」この店が結構いい味の肉まん売つて
たり……」

指先を使って、四十七層の地理や情報を説明していく。丁寧に説明
していき、説明が丘の少し前まで来たところで、あることに気づい
た。

部屋の前にプレイヤーがいるのだ。それもさつきから全く動こうと
しないで、この部屋の前にいる。話を続けながらも、扉に向って歩
いていくのを不思議に思ったシリカが視線を向けてくるが、それに
静かにといふジェスチャーをして、扉の前に近づく。一気に扉を開
くと、田の前にいた男に言い放つ。

「こんな時間に何の用事だ? といつより、上はどじだ?」

盗み聞きをしていた男は、答えずに一田散に逃げていく。追いつこ
うと思えばいくらでもできるが、下手に捕まえない方が得策だろう
と考えそのまま見送る。すぐにシリカが部屋から顔を出したが、も
うその時には、男は階段を下りて行く所だった。

「な、何……!?

「大方盗み聞きだらうな」

「え……でも、ドア越しじゃあ声は聞こえないんじゃ……」

「聞き耳スキルってのを上げてれば、聞くことができるからな……
尤も上げてもたいしたことはできないけどな」

シリカを部屋の中に戻し、扉を閉める。そしてテーブルの上の銃の
ところに向う。

「これ研いじゅうからちゅうと待つてくれるか？シリカにはもう見せたからしようがないけど、他の人には見せたくないから」

「大丈夫ですけど……それって銃、ですよね……？」

「エクストラスキル『銃火器』ね。まあ、とあることで取ったんだよ」

「へえ……」

そこで話を切り上げ、銃の研磨に集中する。ただ乗せとくだけでもいいが、おざなりにすることはしない様にしている。
研磨はすぐに終わり、銃と回転砥石をアイテム欄に仕舞う。それから、シリカのほうに向き直った。

「時間も時間だし、少し早めに説明するが……」

と声をかけたが、彼女は俺のベットの上でもう眠りに落ちていた。
何度も体をゆすってみるが、一向に起きる気配はない。

「……」
「……」
「……」

起こすのを諦め、掛け布団をかけてやる。それから、さつき起こつたことを考えた。

多分、今俺たちは犯罪者オレンジ、ギルドに目をつけられている。シリカにはかわいそうだが、すこし荒事になるかもしれないな……
そう考えつつ、俺は床で寝ることにした。

明日の説明（後書き）

感想とか待つてます！！

フランガーテン（前書き）

今日は戦闘の前までですね。
では、どうぞ！

フランガーテン

朝、いつもと同じように田代が覚めた。ただし、床でだが。起き上がり、一度伸びをしてからベットの上のシリカがまだ寝ているのを確認して部屋を出る。一階に降りて、そのまま宿を出ると転移門に向かう。ただいまの時刻は午前5時だ。

程なくして転移門に着く。転移門の近くで売っている新聞、新聞と言つても現実世界のものとは違い一枚の羊皮紙でできてい、内容もS A Oの攻略関係がメインのものを情報屋ギルドが売っているだけのものなのだが、それを全種類買って宿に戻る。その後宿の隣のNPCの商店に寄つて、今日使う消耗品を買い揃える。NPCの商店の消費アイテムはPCの商店に比べて少し高くなっているが、今時間で開いているPCの商店は珍しいだろう。俺はエギルの店しか知らないし、そこだつて俺がむりやり押しかけて行つてゐるようなもんだしな。

そして、買つてきた新聞を読みながら部屋の扉を開けると、ベットの上でシリカが両手で顔を覆つて身悶えていた。この世界では扉を開けても音がしないため、まだシリカは俺が帰つてきたのに気づいていないようだった。とりあえず、一声かける。

「おはよう。よく眠れたか？」

「！」

シリカが驚いた様に顔を上げて、じつちの方を見てくる。それから、周りをキョロキョロと見渡して

「あ、え、えと・・・おはようござります・・・」

そのときに田が合って、シリカの顔がカツチと赤くなる。さすがに昨日あつたばかりの異性の部屋で寝るというのは恥ずかしいだろう。すぐにシリカが田を逸らす。

「あの・・・その、すいませんでした・・勝手にベット占領して・・」

「大丈夫だから気にすんな、それより今日のことだが・・・」

シリカが落ち着くのを待つて、今日の打ち合せを始める。それから朝食やら準備やらで1時間と少し経った。準備が終わつた後、2人でゲート広場に向い、転移門で移動しようとしたのだがそこでシリカが立ち止まつた。

「あ・・・。あたし、四十七層の街の名前、知らないや・・・」

そういうえば教えてなかつたか？シリカがマップで層の名前を確認しようとしたので、右手を差し出しながら、

「俺が指定するよ、そっちのほうが早いだろ」

シリカが差し出した腕をおずおずとつかんだのを確認してから

「転移！ フローリア！」

一瞬視界が真っ白になつた後、エフェクト光が薄れていき視界が戻る。田の前に無数の色彩が走る。

「うわあ・・・・」

隣でシリカが歓声を上げる。田の前には無数の花々で溢れかえり、今が盛りとばかりに咲き誇っている。

「すい・・・」

「『Jの層は^{フラワー・ガーデン}通称つて呼ばれてて、この層全体が花で溢れている。このほかにも北の端にある《巨大花の森》とか南西にある《虹の野原》とかも結構綺麗だぞ」

「それはまたのお楽しみにします」

シリカは笑つてから、近くの花壇の前に座り込んだ。SAOでは、《ディチール・フォーカシング・システム》なるものが投入されており、その人が視線を凝らしたものにリアルなグラフィックが見えるようになっている。さつきからじっと花を見ているだけあって、シリカは花自体は好きなのだろう。この先に出るモンスターのことを見像しながら、心の中で合掌しておく。すると、シリカがこちらを見てきた。

「ん、どうかした?」

「あ、いえ・・・それよりフィールド行きましょうー」

「こきなりどうした?別にいいけど・・・」

なぜか、最後の方が早口になつて言つたシリカが先に歩き出した。それについては特に深く考えもせずに俺は先に歩いていくシリカの後を追つた。

フランガーテン（後書き）

ほとんどストーリー進んでないですね・・・
感想とか待ってます！！

アネツマの花の採取（前書き）

区切るといつもがまちまちな所為で、一つの話の文字数にぶれが・・・
では、どうぞ！

ブネウマの花の採取

「さて……」いつから冒険開始なわけだけど……

「はい」

今はファイールドと街との境田の南門に来ている。俺の呟つた言葉にシリカが表情を引き締めて、頷いた。

「シリカのレベルと装備なり、こここのモンスターは倒せないほどでもない。だけど……」

もう一度シリカの顔を見て、続ける。

「フィールドでは何が起こってもおかしくは無いからな。もしも、予想外のことが起きたらすぐに転移結晶で街に戻ってくれ、そのときは俺のことは考えなくていい」

「で、でも……」

「死んだら元も子もないからな。俺も逃げに徹すれば、こちら辺のモンスターたちは振り切れる。だからその事だけは守ってくれ」

念を押すと、シリカは頷いてくれた。少し暗い表情になりかけるのを見て、一いつと笑いながら締める。

「それじゃ、行こうか」

「はい！」

すぐに明るい笑顔を取り戻したのを確認して、俺はアイテム欄から武器を取り出す。現れたのは、

「短剣ですか？それも2本？」

取り出したのは2つの短剣。だが、少し秘密がある。右の短剣を少し上げて、

「まあ、銃^{あれ}は他にプレイヤーがない時しか使わないからな。こっちのは正真正銘の短剣なんだけどな・・・」

そういうて左の手を振る。すると、短剣が4つに別れ、扇子状の形になる。

「これは短剣としても一応使えるが、ホントは投劍でな。投擲して使うんだ」

「そんなの初めて見ましたけど・・・」

「まあ、これも製造アイテムだから、普通の店では売ってないからな」

そのまま、4つの投劍を元に戻す。一通り武器の紹介を終えたところで、フィールドへ繰り出した。

シリカは足手まといになるまいとしているようだが、このモンスターを見ても大丈夫だろうか・・・

などと考えつつ、フィールドをザクザクと進んでいった。

「ぎゃあ、ぎゃああああああ！？なにこれ・・・？あ、気持ちワル

「……」

フィールドに出てから数分後、最初のモンスターとエンカウントしたのだが、どうやら俺の予想は当たったようだつた。今俺たちと敵対しているのは、一言で言つて《歩く花》だ。この層は街だけでなく、モンスターなども《花》だ。目の前には、ヒマワリの様な花の中にぱっくりと口を開いた、よくゲームであるような花型モンスターがいる。

「や、やあああ……来ないで」「

「アクティブモンスターだから、近づいてくるやー」

「やだつてば」「

花好きだからこそその嫌悪感があるのだろう。シリカはほとんじ田をつぶりながら短剣をふんぶん振り回してくる。あれじゃあ、モンスターに攻撃が当たることはないので、少し忠告してやる。

「せひんと見て攻撃しないと当たらないやー。花の下の少し白ごとにゃくけば簡単に倒せるはずだから、やってみな」

「だ、だつて、気持ち悪いんです」「

「そいつはまだましな方だぞ。これが3つくつ付いたやつとか食虫植物みたいなもの」の先いるぞ」

「キエ」「……」

もうそれ以上聞きたくないので、変な奇声を上げながら滅茶苦

茶なソードスキルを繰り出す。当然その攻撃は空を切る。すると、2本のツタが技後硬直時間で動けないシリカの両足をぐるぐると捉え、その外見からは想像できない怪力でひょいと持ち上げた。

「わー!?」

ぐるん、と宙吊りにされてシリカの体が上下逆さまになる。当然彼女のスカートは、仮想の重力に馬鹿正直に従つてずりりつと下がってしまう。あわててシリカは左手でその裾を押さえて、右手でツタを切ろうとしているものの、体勢が不安定な所為でうまくいってない。シリカが必死に助けを求めてくる。

「れつ、レイトさん助けて！見ないで助けて！－！」

「その2つは矛盾すると思うんだが・・・せいつ」

答えつつ、左手の投剣を指弾で投擲する。スキルは使ってないが、1つのツタに2本ずつ刺さり、ツタを断ち切る。ツタから開放されたシリカが体勢を直し、そのままソードスキルを放つと歩く花はボリゴンの欠片となつて爆散した。するとシリカは振り返ると同時に訊ねてきた。

「・・・見ました？」

「・・・見てないよ」

絶対に見ていないと断言しよう。

その後、5回ほど戦闘をこなしたあたりでシリカもモンスターの姿にも慣れ、2人は快調に行程を消化していった。俺は戦闘ではほとんど攻撃せず、シリカが避けたり捌ききれていない敵の攻撃に対し

て、投擲してその攻撃を止める、ということに徹していた。パーティプレイではモンスターに「えたダメージの量によって経験値が分配されるため、ほとんど経験地はシリカの方にいき、彼女のレベルはたちまち上がつていった。

赤レンガの街道をひたすら進むと小川にかかる小さな橋があり、その向こうにひときわ小高い丘が見えてきた。道はその丘を巻いて頂上まで続いている。

「あれが『思い出の丘』、今回の目的地だ」

「見たとこ、分かれ道は無いみたいですね？」

「ああ、頂上まで一本道だ。だけど、進むにつれてエンカウント率が高くなるから油断しない方がいい」

「はいー。」

もうすぐピナが生き返らせられるとあって、シリカの歩く速度が早くなる。予想通りモンスターとのエンカウント率が高くなり、ひたすら向つてくるモンスターたちを返り討ちにする。シリカに渡した短剣は俺が前使っていた短剣で最前線では少し心もとないが、ここでは十分な威力を發揮する。その証拠にシリカが放つ連続技のワンセットで、大概のモンスターは落ちている。そして、丘に入つてからは俺が一人を残して投劍で撃破していくので、一つの戦闘は大して長引きもせず終わってしまう。

モンスターの襲撃を退けて、高く繁つた木立の連なりをくぐり、やつと頂上についた。

「うわあ・・・！」

シリカが歓声を上げて、先に駆けて行く。

そこは木立に周囲を囲まれ、ぽつかりと開いた空間一面には美しい花々が咲き誇っている。

「ふう、ついたか……」

安全地帯に着いたことに一安心しながらシリカに歩み寄る。

「…………その、花が…………？」

「ああ、そこに見える岩のてっぺんに咲くらしつつ聞いてないし……」

シリカは俺が言い終わる前に走り出していた。彼女の胸ほどまである岩に駆け寄り、おそるおそる上を覗き込んでいる。シリカの方に歩いていくと、突然彼女の血相が変わる。

「え……」

シリカの元にたどり着いてみると、彼女がこつち振り返つて叫んできた。

「ない……ないよ、レイドさん!」

「おかしいな……。——お、あれじゃないか?」

もう一度シリカを促して、岩の方に視線を戻せると、柔らかそうな草の中に、一本の芽が伸び始めているところだった。若芽は普通の花の成長速度の何倍もの速さで成長していき、やがて先端に大きなつぼみを結んだ。蕾は内部から真珠色の光を放っている。

レイトとシリカが見守る中、徐々にその先端がほころんで、しゃらんという音と共にしぶみが開いた。

二人はしばらく身動きもせずに、咲いた花を見つめていたが、やがてシリカがこちらに確認するような目線を向けてきた。これを取つてもいいのか？ そういう視線だった。

俺が一つ頷くと、シリカが意を決したように頷き返し花にそっと手をのばした。細い茎に彼女が触れた瞬間、花は氷のように砕けシリカの手に光る花だけが残った。

シリカがその花の表面をそつと指でなでる。すると、ネームワインドウが音も無く開いた。そこに書かれた名前は——『プネウマの花』。

ブネウマの花の採取（後書き）

どうだったでしょうか？

次回はタイタンズハンドとの戦闘ですね。

戦闘と呼べるものになるかどうかは分かりませんが・・・

感想とか待ってます！！

カレンバッシュの境目はなんだ？（前書き）

次回で黒の剣士の範囲が終わると思こます。

次はどうよいか・・・

では、どうだ！

オレンジとレッドの境目ってなんだろう

「これで、・・・ピナを生き返らせられるんですね・・・」

「ああ、その花の滴を形見に振りかければ、戻るはずだ。ここでやつても、問題はないんだが・・・ここは来た時に分かつただろうが、モンスターとのエンカウント率が高い。だから、とつとと宿に戻つてからにしたほうがいいだろう。ここで生き返つて、帰り道でまた死んでしまつた、じゃ元も子もないからな。それじゃ、そろそろ帰ろうか」

「はい・」

本当はここで使いたかったのだろうが、レイトの言葉を聞いて納得したシリカはプネウマの花をアイテム欄に仕舞う。
まずは、安全に街までたどり着くことが先だ。シリカを促して、もと来た道を戻り始める。

帰りは行くときに大量に狩つてしまつたせいか、ほとんどモンスターとエンカウントしなかつた。シリカもプネウマの花を入手できたせいが、足取りも速かつた。

ほどなくして麓まで戻つてきた。あとは、街道を歩くだけだろうが・・・

ふと、索敵スキルに何かが引っかかつた。見逃すわけないとは思つていたが、このタイミングで来たか・・・。

先でスキップしながら小川を渡ろうとしているシリカの肩に手を掛ける。シリカがびくつとしてこちらを振り返つたが、俺は視線を橋の向こう側からはずさなかつた。そして、アイテム欄からこの時のために用意しておいた道具を取り出す。それを見てシリカが話しかけてきた。

「どうしたんですか・・・？それ、メッセージ録音クリスタルですかね？」

「うーん、ちょっとした野暮用というかなんというか・・・。とりあえず、俺がこれ投げたら耳をふさいでくれ

シリカはさらに訳が分からなくなつたようだが、それに構わず俺はタイマーを5秒にして橋の向こうにメッセージ録音クリスタルを投げつける。さて、いつまで耐えられるかな・・・。橋の向こうにメッセージ録音クリスタルが落ちる。それから、本来の用途どおり、音声を再生した。

ギャリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ
ギャリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ

結晶から金属が嫌にこすれあう様な音が再生された。実質、高速研石に適当な金属をわざとこんな音が出るようになつたのだが・・・。橋のこちら側でもこれだけの音量なんだ。向こうはどうほどの音量になるのか。ちなみにこの音は10分間流れ続けるぞ。

すると不意に誰かが出てきて、メッセージ録音クリスタルを叩き割つた。それを確認して、

「結構高かつたんだけどな・・・。目的は果たせたからよしとするか」

「え・・・？」

音が消えて耳に手を当てていたのをやめたシリカが俺の言った言葉に驚く。すると、さつき出てきた男だけでなく、橋の向こうの草む

らからそろそろとプレイヤーが出てきた。ザツと数えて十人くらいか。色はほとんどがオレンジが多いが・・・。

さうい、橋の向こうに出てきた顔の中に昨日見かけた顔があった。

「う・・・ロザリアさん・・・? 何でこんなところ・・・?
?」

出てきたプレイヤーの一一番前にいたのは、昨日宿の前であつたロザリアだつた。彼女は、シリカの問いかには答えず、俺のほうを睨んできた。

「よくもやつてくれたわね、あなたの素敵スキルは認めるけど、あんたにはマナーつてものが無いのかしら」

「オレンジにマナーについていわれるとはな。尤も、お前らも持ち合わせていないだろ? マナーの無いものにマナーを持つて接する理由が無い」

オレンジとはオレンジギルドやオレンジプレイヤーを主に指す言葉で、システム上の罪を犯したものがなるカーソルの色からそう呼ばれている。

俺がロザリアからの罵倒を軽く流すと、ロザリアは今度はシリカのほうに視線を向けた。

「その様子だとし、首尾よく『ブネウマの花』をゲットできたみたいね。おめでと、シリカちゃん」

シリカがロザリアの真意がつかめず、数歩後ずさる。すぐロザリアが続けた。

「じゃ、せひそくその花を渡してみようだい」

「…………な……何を言つてゐる……」

俺はシリカの前に出て、シリカを背中の後ろに隠す。

「わのそろこいか? とつとと道を開けろ」

「は? あんた今なんて言つたの?」

「だからオレンジギルドとの戦闘なんて時間の無駄だから、とつと道を開けろって言つてるんだ」

「え・・・でも・・・だつて・・・ロザリアさんは、グリーン・・・」

「

俺がロザリアと話をしているとシリカが質問してきた。シリカのほうに向き直り、説明する。

「全員がオレンジだと、街で動きにくいやからな。何人かはグリーンが入つていて、オレンジギルドの狩る得物を見繕つてるんだ。昨日、部屋を盗聴してたのもそこのグリーンの奴だ」

「そ・・・そんな・・・」

シリカが愕然としながらロザリアを見る。

「じゃ・・じゃあ、この2週間一緒にパーティにいたのは・・・」

「ま、シリカが前いたパーティの戦力評価って所だろ? だけど、

シリカがプネウマの花を取りに行くって聞いたからこっちに獲物を変えたんじゃないかな？」

そこで話を区切ると、ロザリアが割り込んできた。

「そんなところね。でもあんた、そこまでそこまで分かつてながらノコノコその子に付き合つとか、馬鹿？それとも本当に体でたらしこまれちゃったの？」

「邪魔だ、どける。これ以上お前と話している時間がもったいない」

オレンジにどうこう言つたって意味が無い。殺氣を橋の先にいるオレンジたちにぶつけと、オレンジたちは一瞬ひるんだが、動こうとはしなかった。

「でもさあ、たつた一人でどうにかなると思つてんの……？」

十人ほどのプレイヤーたちは武器を構えた。全員がニヤニヤと笑いながらこっちを見てくる。

「はあ……警告はした、死んでも文句は言わせないからな……」

俺は武器に手を掛けた。

オレンジとレモンの境目ってなんだらう（後書き）

レイトせいですね、はい。
また変なところで区切つてしまつた・・・
次回で本当に終わるかな?
感想とか待つてます!!

臆病な殺戮者（前書き）

投稿遅れました、すいません！

テスト期間中なので、両親に見つからない様に書いてたら・・・
今までかかってしました。

結局黒の剣士の範囲終わりませんでした。
では、どうぞ！

臆病な殺戮者

「れ、レイトさん……人数が多くすぎます、脱出しないこと……」

俺の後ろに隠れていたシリカが小声で囁きかけてきた。

「うーん、確かにそうした方が良いかもしないなあ。この人数だと片付けるのに少し時間がかかるだらうし、だったら多少値は張るが転移結晶使った方が早く帰れるか……？」

「え……？いや、そういうことじゃなくて……」

どうする？この人数相手にすると3分はかかるし、銃使えばもっと短縮できるけどこんな奴らにユニークスキル見せるのも馬鹿馬鹿しい。それだったらシリカが言つように転移結晶使った方が早いか？でも、こいつら野放しにすることになるんだよなあ。そうなるとまたシリカに被害が出ないとは言い切れないし、よし。

「ま、ちょっと時間かかるけど待ってくれや」「

シリカの頭をぽんぽんと軽く叩くと、そのまま橋に向つて歩いていく。どうやって時間短縮するか考えていると、後ろから呼びかけられた。

「レイトさん……！」

その声がフイールドに響いた途端

「レイト……？」

不意に賊の一人が呟いた。それまでの笑いを消して、記憶を手繕るよつに視線を彷徨わせている。

「朱のマントと両手に短剣…… 『臆病な殺戮者』…… ?」

急激に顔を蒼白にしながら、男が数歩後ずさる。

「や、やばいよ、ロザリアさん。ここいつ…… 攻略組だ……」

オレンジたちの顔が一様に強張った。まあ、そうだろう。最前線で未踏破の迷宮に挑み、ボスモンスターを次々と屠り続ける《攻略組》がこんなところにいるのだから。後ろで同じように驚いているシリカみたいな《ビーストティマー》よりも《攻略組》は珍しいと言われている。更にその中でも珍しい二つの名持ちなのだから、彼らの動搖は大きい。

「……攻略組がこんなとこをウロウロしてるわけないじゃない！どうせ、名前を騙つてびびらせよつてコスプレ野郎に決まってる。それに もし本当に『臆病な殺戮者』だとしても、近づけばたいしたこと無いわよ！！」

「そ、そうだ！ 攻略組なら、すげえ金とかアイテムとか持つてんぜ！ オイシイ獲物じやねえかよ！…」

ロザリアの一言で勢いづいたように、オレンジたちが叫んだ。

「あのなあ。名前騙つてびびらせよう、ってだけでこんな紙みたいな守備力の防具をフイールドで着けてる奴なんているわけないだろ

うが。それに「スプレーするなら『黒の剣士』とか『神聖剣』とかの方が有名だと思うけどな・・・」

ぼやきながらも、橋がかかっている先端にたどり着くと、またシリカに呼びかけられた。呼びかけられたというよりは、呼ばれた方が正しいか。

「レイトさん・・・無理だよ、逃げようよ！――」

シリカの声には応えず、両腕をだらりと下げる。一応これが俺の1年間の経験で、次の行動に最も早く移せる構えだ。それをオレンジたちは諦めと取つたのか、ロザリアなどのグリーンプレイヤーを除いたオレンジたちが武器を構え、猛り狂つた笑みを浮かべ、こちらへ向つてきた。短い橋をドカドカと駆け抜け

「オラアアア――！」

「死ねやアアア――！」

半円状に取り囲み、斬りかかるつとして

ドサツ・・・

一番最初に斬りつけてこようとした、刀を持った男の腕が落ちる。落ちた腕はポリゴンの欠片となって消えていく。『部位破壊』だ。部位破壊とはHPとは別にある体の各部の耐久度がなくなつた時、その部位が消滅するシステムだ。消滅といつても永久ではなく、街の中などに戻ればすぐに再生はするが。

「は・・・？」

腕を破壊された男が呆けたように呟く。それを見て、一瞬オレンジたちの動きが止まる。その間にまた一人の腕が飛ぶ。

「お・・おい、お前・・・今、何しやがつた・・!」

「何つて、部位破壊だけど?」

「やうじやなくて、どうやって部位破壊したんだよー!」

「いりやつて」

男と喋っている間にスキルの待ち時間が終わり、もう一度短剣スクリ初級間接技《ショートスラッシュ》を放つ。短剣から、薄い水色の小さな衝撃波が目にも止まらぬ飛び、また一人の腕を飛ばす。前の2回もこれを使つただけだ。ひたすら敏捷力にパラメータを振っていた俺の衝撃波は、もう斬撃と呼べるまでの速度になつていて、さらに腕の中で最も耐久度が低い腕の付け根を狙つているため簡単に部位破壊ができた。

3人目が部位破壊にあつてようやくタネが分かつたのか、残つたオレンジたちが一斉に武器を振り回していく。

「あともう一つ言つとくが、俺は《近づかない》んじゃなくて、《近づけさせない》んだよ」

武器の射程に俺を入れた奴から部位破壊をしていく。スキルの待ち時間中に近づいてこようとする奴には投劍で足止めし、両手武器や重装備をしている奴らは足を切り落としていく。

これが俺が《臆病な殺戮者》と呼ばれている由来だ。絶対に相手の射程に入らず、その位置からひたすら相手を攻撃していき、一撃も

食らわずに片付ける。

斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る、斬る
数分もしないうちに、俺に向ってくるオレンジは一人もいなくなつた。目の前には腕や足などを切り落とされ、戦意を失ったオレンジたちがいる。彼らの顔には恐怖が張り付いている。

「む、むちゅくちゅじゅねえかよ・・・」

「ああ、そうだ。だが、それがどうした？お前らも重度のネットゲーム一癡だつたら分かるだろ？それがレベル制MMOの理不尽さだつて！」

レベル差があるだけで、ここまで無茶な差がつく。圧倒的な、戦略だけではどうにもならない差が。

「チツ」

不意にロザリアが舌打ちすると、腰から転移結晶をつかみ出す。それを宙に掲げ、口を開く。

「転移けつ」

その言葉が言い終わらぬうちに、投劍と投擲し転移結晶に当てる。パリンと音を立てて転移結晶が砕け散った。

「ひつ・・・ビ、ビツする気だよ畜生ーー！」

さて、ここからをどうするか・・・。ほっとけばまた悪事を再開するだらしく、かといって全員牢屋までつれてくのも面倒だ。

「おーい、ちょっと待ってくれ！」

いい解決策が浮かばず悩んでいると、街道の方から見覚えがある黒

仄くめが走ってくるのが目に入った。

臆病な殺戮者（後書き）

レイトは依頼主との関係が無いので、キリト登場です。
次で終わるといいな・・・
感想とか待ってます！！

長かった一日の終わつ（前書き）

久しぶりの投稿ですね・・・
ちょくちょく書いてはいたのですが、納得できるのができなくて遅
くなりました。
ではどうぞ！

長かった一日の終わり

街道の方から走ってきたのは、黒の剣士ことキリトだった。キリトは橋の近くまでくると、あたりの惨状を見て、一いち方に顔を向けた。

「よつす、クロノ。お前がこんな中層まで降りてくるのは珍しいな
「よつすって……これ、やっぱりお前がやつたのか？」

「あっちから仕掛けてきたんだから、正当防衛だ。それにまだまし
な方だと思うが？」

それは事実だ。今のレイトのレベルとスキル熟練度があれば、オレ
ンジたちの四肢全て切り落とすことも簡単にできる。今それをしな
いのは、面倒だから。ただ、それだけの理由だ。

「レイト、こいつらの処遇、俺に任せてくれないか？」

「クロノが？ まあ、俺も決めかねてたから別にいいけど」

キリトは俺の返事を聞くと、腰のポーチから青い結晶を取り出した。
転移結晶も青色をしているが、それはもつと濃い青だつた。^{回廊結晶}回廊結
晶、基本は転移結晶と同じだが、転移結晶はその層の転移門にしか
戻って来れない。しかし、回廊結晶は出口を自分で指定でき、自分
の好きな場所に移動できる優れものだ。その分、回廊結晶は転移結
晶とは比べ物にならないほど高価なのだが。

「あるギルドのローダーから、これであんたらを黒鉄宮の牢獄に入

れてくれと依頼を受けてな。あとは《軍》が面倒見てくれるや。」「リードーオープン！」

キリトが叫ぶと、瞬時に結晶が砕け散り、その前の空間に青い光の渦が出現する。

オレンジプレイヤーたちが、ある者は毒づきながら、ある者は無言で光の中へ飛び込んでいった。盗聴役のグリーンプレイヤーもそれに続き、ロザリア一人が残るだけとなつた。

だが彼女は一向に動く気配を見せず、それどころか挑戦的な視線を投げかけてきた。

「・・・やりたきや、やつてみなよ。グリーンのアタシに傷をつけたら、今度はあんたがオレンジに・・・」

「オレンジに、つて別に傷つけなくても、つかんで投げ飛ばせばいいだけの話だろ?」といふわけで、よろしくクロノ

「俺かよ!」

システム的に、ダメージを与えなければいいだけなのだ。それなら、ただ単にそこまで引っ張つていけば

それですむ。言つといて自分でやらない理由は別にあるんだが。

「フ、舐めるなよクロノ。俺の筋力値は、武器と防具が装備できるギリギリのラインまでしかないからな。よつて、俺ではこいつを動かせん」

「それ、皿邊でもなんでもないぞ・・・」

キリトがぶつくさ言いながらも、ロザリアの襟首をつかんで回廊の

方へ歩いていく。ロザリアは最後のまで抗っていたが、キリトが力任せに回廊に放り込むと、その姿は消えていった。

「それで、クロノ。結局何があつたんだ？」

「うーん、どうから話せばいいんだ？ほら、昨日レイドと別れた後・
・」

「あ、ちょっと待つて！」

話し始めようとしていたキリトを制して、シリカをこっちに呼ぶ。彼女が来ると、キリトが聞いてきた。

「その子は？」

「今回の一番の被害者。クロノ、彼女はシリカ。まあ色々あつて俺とパーティを組んでる。さっきのオレンジたちに目をつけられたのもシリカだし」

次に、シリカのほうを向いて言つ。

「シリカ、この全身黒いのがクロノ・じゃなくてキリト。攻略組の一人だ」

「初めてまして、キリトさん」

「全身黒いのってな・・・まあ、よろしくシリカ」

二人の自己紹介が終わるとキリトが話の続きを話し始めた。

「簡単にまとめると、さつきのオレンジ達がギルド襲って、その仇討ちをお前が引き受けた、ってことでいいか？」

「そんなところだ。とりあえず悪かったな、レイト」

キリトが頭を下げる。そんな頭下げられるようなことはしてないんだが・・・

「謝るなら俺じゃなくてシリカにだろ。俺のほうは貸し一でいいから」

「あ、いえ、大丈夫です。レイトさんが全部片付けてくれましたし」

それでこの話は打ち切りになった。キリトは依頼者に報告していくと言つて帰つていった。キリトの姿が見えなくなると、シリカが話しかけてきた。

「レイトさん、ありがとう」

「いや、だからそんな礼を言われるよつなことはしてないって。それよりも、早く街に戻つてピナ蘇生させないといいのか？」

それを指摘すると、シリカはそのことをすっかり忘れていたようであ、と声を出した。

「やつでしたー早く戻りましょー！」

シリカは俺の腕をいきなり引っ張り、凄い勢いで街への道を走り始めた。すると、さつきも言ったとおりこの装備ができるギリギリの筋力値しかない俺は、なすすべも無くシリカに引っ張られるわけで。

かなり変な体制のまま全力疾走することになった。

それから、十数分くらい経つて俺たちは35層の『風見鶏亭』に戻つてきていた。

「足がつる……」

全力疾走を終えた俺はベットに突つ伏していた。システム的にこの世界では息切れなどは起こらないが、それはこの世界の体のことだ、今も眠り続けている現実世界の体は心拍数は上がっていることだろう。

「す、すいません……」

シリカも宿について、やつと俺を引っ張つて走つているということに気づいた。やはり、ピナの事で頭がいっぱいでいたのだろうが。

「いいから、いいから。それより、さつやとピナ蘇生してやりな

体勢を直して、ベッドの縁に座りなおす。

シリカが花の滴をピナの心に振りかけると、羽が光りはじめた。光はだんだん大きくなつていき、シリカの両手ぐらいの大きさになると、ひときわ強く光り、中から水色のフワフワとした小竜が現れた。

「ピナ……！」

シリカが再び会えた自分の使い魔をギュッと抱きしめる。蘇生は成功したようだつた。

ピナの姿を見るに、種族名^{フエザーリング}だろつ。元々出る確率も低く、エンカウントするだけでも大変なはずなのだが、それをテイムできたシリカの幸運にも俺は驚いていた。

「どうあれ、おめでと！」

俺が声をかけるとシリカはありがと「うん」と元気よく返したのだが、その直後、何かに気がついたかのように口を開じてしまった。

「どうかしたか？」

「あの・・レイトさん・・行つたやうんですか？」

「行く・・・あ、最前線に戻るつて事？まだ戻らないよ」

よっぽど俺の答えが意外だつたのか、シリカはぽかんと口を開けてしまつた。

「え？ 攻略に戻らなくてもいいんですか？」

「うーん、不謹慎だとは思うんだけど、はつきり言って俺攻略にあんまり興味ないんだよね」

シリカは俺の意図がつかめていないようで、首をひねつている。

「前に言つたかもしけないけど、俺は楽しむことを第一に考えてるからな。だからこう、毎日最前線でひたすらレベル上げするのさ、性に合わないといつか」

「じゃあ、まだここにいるんですか？」

「明日からさ、ここよつもつと下に行くなぞ？ やりたいことがまだ結

構残つてゐるから、最前線に顔出すのは結構後になると想つ

そこで、一回話を切り、もう一度話し始める。

「そこで相談なんだけど、シリカつて明日から暇？」

「え？ 私ですか・・・？ 特に用事はありませんけど・・・」

「もしよかつたら、明日からもパーティー組まないか？」

「私ですか！？」

驚いているシリカに俺は頷きを返し、続ける。

「パーティー用専用クエストも結構たまつてゐるし、そのピナにも興味あるし。もし、シリカがよかつたらだけど」

「お願いします！！」

少しは悩むかと思つていていたのだが、シリカからの答えは即答だつた。

「いいのか？ 強制はしないけど・・・？」

「大丈夫ですー！」 ちらりちらりとよろしくお願いします！！

またも即答だつた。それにせつてかなり嬉しそうにしているのが分かつた。

まあ、シリカが良いといつんだつたらいいのだ。俺はシリカに向つて、手を出した。

「ひねりも、なんへ

長かった一日の終わつ（後書き）

やつと、黒の剣士が終わつた・・・
次からオリ話が多く入ると思います。これからが書きたかったこと
なので。
感想とか待つてます！！

べじふわと檜と（前書き）

オリ話に入りました！
こっちの方がすらすら書けるといつ・・・。
今回は前置きみたいなものです。
では、どうぞ！

「いっちは準備できましたー！」

シリカの声を聞いて、俺も目の前にあるスイッチに手を置く。

「押すぞー、せーの！」

スイッチに力を入れると、がこんと音がして地面に埋まっていく。これでここも終わりか。

初めてシリカとパーティを組んでから、もう一週間が経った。

今日、俺はシリカとあるクエストをするために1層に来ている。クエストとは、ここ1層の東西南北に設置されたスイッチを押す、という単純かつ簡単なもの。なにだが、各場所に2つあるスイッチを同時に押さなければならぬという内容のため、パーティクエストとなってる。

報酬は結構1層でもらえる物にしてはいい物なのだが、ある理由から余りこのクエストはプレイヤー達には人気ではない。

「よし、これで三つ目終了か。後一つだな」

俺とシリカは東から始めて、北を通って今西の物を終わらせていた。

「後、南でおしまいですね。でも、皆がやりたがらない理由がよく分かりましたよ」

シリカが苦笑しながらこっちまで戻ってきた。

このクエストが人気ではない理由、それはこの層の広さにある。この層の直径はおよそ十キロメートルもあるため、とても時間がかかる

るのだ。それに加えて、その距離をモンスターと戦闘しながら進まなければいけないのである。更に一人ではクリアできないという不便さもあって、このクエストは不人気なのだ。

「まあ、距離が距離だからな・・・。この世界では歩き続けても疲れることが無いけど、それを差し引いてもあまり進んでやりたいと思つやつはないだろ」

「確かに、初心者がやるなら赤字覚悟しないといけませんよね・・・」

肩に乗つているピナをなでながら、シリカは呟いた。
さてと次の場所に行き・・・と。

「シリカ、前方から敵。数は3」

索敵スキルに引っかかった情報をシリカに伝えると、一応俺も腰から短剣を抜く。

少しして、モンスターが前方の草むらから飛び出していく。そのままモンスターたちの射程に入る前に、短剣スキル《トライエッジ》を放つ。モンスターに飛んで行った3つの緑の衝撃波は、そのままモンスターをポリゴンへと変えた。

「レイトさんが全部片付けちゃうなら、私に伝えなくてよかつたんじゃないですか？」

短剣を仕舞つと、シリカから軽い非難の声が飛んできた。

「俺がやつた方が早いし、情報は一応伝えといった方がいいだろ」

「それはそうですが……」

「俺がいきなり武器抜いても警戒されるだろ。ほら、次のところに行くぞ」

シリカの頭をポンポンと叩いて、南に向って歩き出した。
それから、少し経つてシリカがふと思いついたかのように聞いてきた。

「そういうえば、レイクさんってどこかギルド入つてたりしたんですか?」

「いや、俺はギルドに入った事もないし、これからも入る気はないけど。なんでそんなことを?」

いきなり聞いてきたシリカに問い合わせ返すと、シリカは首をかしげながら答えてくれた。

「レイトさんがパーティの役割をきちんとわかつてたことに疑問を持つたんですよ。前にだれかとパーティを組んでたかみみたいに連携がうまくかつたですし」

シリカにそれを言われた時、俺はほっとすると同時に胸がチクリと傷んだ。

「ああ・・・前にあるパーティには入つてたんだけど・・・」

あのパーティに俺が入っていた頃はこの世界で一番の楽しかった頃でもあり、それと同じくらいに一番辛い頃もある。あの頃は・・・いや、これ以上は思ひ出さないほうがいい。

「『めん。あのことは今は話せない……』

珍しく俺が言い淀んでいるのを見て、シリカはそれ以上深く聞いてきたりはしなかった。

「……ですよ。誰でも話したくなことの一つもあつてないでしょう。さ、早く行きましょう」

「『めん……』

この話を切り上げてくれたシリカに感謝しながら、俺は歩き始めた。クエスト自体はそれから1時間程度で終わつた。4つ目のスイッチを押し、始まりの町にいた依頼者にクエスト報告をしていた。

「おお、やつてくれたか！これで『あらも研究ができるわい。これは報酬だ、持つて行ってくれ』

この依頼者というのがエギルもかくやという位のめちゃくちゃ体がゴツイおっさんなのだが、この体格で研究者とは……。いつたい何を研究しているのか疑問に思つたが、話を切り上げ外に出る。外で先に終わらせていたシリカに話しかける。

「シリカは何出た？」

このクエスト、基本報酬は確定ながらも、そのほかにランダムでアイテムが1つ出るのだ。一種のくじ引きの様なもので、初心者御用達の消費アイテムから、珍しいのでは中層あたりでも全然使える装備なども出ることがある。これがクエスト参加者全員に出るからうれしいところなのだ。

「私は、『月の欠片の指輪』でしたよー。」

「うそっ、マジでーー？」

『月の欠片の指輪』は装備すると、体力が減っているとバトルヒーリングには及ばないものの、徐々に体力が回復するという永続回復ができるアイテムで、その他にもレベルアップ時に自分で振れるパラメータが1上がるといったおまけのような効果もついている。この指輪はこのクエストで出るアイテムの中でも、かなり確率が低かつたはずだ。

「マジですよ、マジ。ほらー。」

シリカはそういうと早速、指輪をオブジェクト化させて自分の指にはめた。俺は改めて、シリカの運の高さに驚かされた。

「もう、いいなあ」

「こればっかりは運ですからね。レイトさんは何でした？」

うれしそうにピナとはしゃいでいるシリカを見ながら、俺もアイテム欄を確認してっと・・・。

「俺は『ウインドスピア』か。まあまあかな」

もらえたのは武器の『ウインドスピア』。槍の一種でとても軽く、ほとんど筋力値が要らない槍だ。もらえたアイテムの中では中の上ぐらいの物だ。

「残念でしたね。レイトさん、槍使えませんし・・・」

「ま、貰える物はもう少しあへれ」

アイテム欄を整理し終わり、閉じる。まあ、槍使える奴に渡してもいいし、Hギルの店で換金してもいいしな。

「それじゃ、今田のところは解散・・・

クエストも終わったし、今日はこれで解散しようとしたがかけた。しかし、そのとき一通のメッセージが届いた。

へじふせと檜と（後書き）

『月の欠片の指輪』は強くしすぎたか・・・?
次から本格的に書いていきたいと思います。
感想とか待ってます!!!

12巻アノール（前書き）

18話目ですね。

FF13-2でホープが出るって分かつて、テンションが上がつて
いる作者ですww

今回はレイトの過去編です。
では、どうぞ！

「今から集まれませんか？」

突然来たメッセージには、そう書いてあった。用件も書かないで送つてくるよつた奴なんて、あいつしかいないだろ。

「どうかしたんですか？」

俺の動きが止まつたを不思議に思ったシリカが声をかけてきた。

「ん、いや、今メッセージが来てな・・・」

集まることに問題は無いのだが、シリカを連れて行くべきか。それが問題だった。

どうせここで解散しようと思っていたのだし、一人で行つてもいいのだが、今から言い出しても不信がられるだろう。少しの間無言で考え、

「シリカ、時間があればちょっと付き合つて欲しいことがあるんだけど」

付き合つて欲しいことがある、などとレイトにお願いされたのは今回が初めてだった。いつに無く真面目なレイトさんは、今までの私が知らなかつた一面だった。

「分かりました」

私が返事をすると、レイトさんはありがと、と小さく言つてから、素早くメッセージ打つと、中心街の方に歩き始めた。昔のことが関係しているのだろうか・・・？

疑問に思いつつも、私はレイトさんの後を追いかけた。
レイトさんがそのまま向つたのは、黒鉄宮だった。ここは、版の頃はプレイヤーたちが蘇生される場所だつたらしい。らしいというのは、私が版をやつたことが無いから。

そこは、今では『生命の碑』と呼ばれている、このゲームでの生死を確かめる幅数十メートルもある岩が置かれている。
レイトさんは一度黒鉄宮の前で止まつて、

「ここに嫌な思い出があるなら、ついてこなくていいぞ？」

すぐに私が首を振ると、レイトさんはそのまま中に入つて行つてしまつた。

少し遅れながら追いつくと、レイトさんは『生命の碑』の右側に座つていた。

私は脇にある柱でレイトさんを待つことにした。

「お待たせ」

数分たつと、レイトさんが戻ってきた。

「じゃ、行くか」

私の知らないことを話してもらえる事がうれしかと、今まで話せなかつたことに触れていいのかという迷いがあった。

それを見抜かれたのか、

「別に大丈夫だぞ？シリカが聞いても。もう俺も克服はしたと思うし……」

「じゃあ……行つてもいいですか？」

「ん、分かつた」

そのまま、レイトさんと内容が無いような話をしながら、転移門まで着いた。

そういうえ、これから行く層を私は知らないことに気がついた。こんなこと前にもあったなあ……

「12層だけど、名前分かる？」

「12層ですか……？ちょっと覚えてないです」

そう言つと前みたいにレイトさんは、腕を差し出してきた。それに掘ると、

「転移！アノール！」

転移独特の光に包まれて視界が変わる。一度真っ白になり、次の瞬間にはさつきまでとは違う景色が広がっていた。

転移して、まず、目に付いたのは城。どちらかといつと古城と呼ばれる感じの城が大きく聳え立っていた。今行ける層にはほどんど行つていた私だが、この層に来たのは初めてだった。

「うーんと……」

隣でレイトさんが何かを思い出すようにうなつていて。びつかしたんだろうか？

すぐ前にあるレンガの家に触れてみようと歩こうとしたら、ん？なんか踏んだ？

「ちょ、待った！！」

レイトさんに腕を引っ張られる。その数秒後に目の前を矢が通過していく。ガツンと矢がさつきまで私がいたところに突き刺さつていた。

「間に合った・・・全く面倒なところに・・・」

「い、今なんですか！？」

街中で武器が飛んでくるなど聞いたことが無い。私が驚きながら尋ねると、レイトさんは困ったように

「アノールは通称、初見殺しの街と呼ばれているんだ・・・。今みたいに街中にトラップとか仕掛けられて、街中じゃダメージは通らないけど、毒や麻痺なら効くからな。全く、こんなところを待ち合わせ場所にするなんて、ラウ姉の気持ちが知れない・・・」

ため息をつきながら教えてくれた・・・。

「ま、ここは一番人気が無い層だと思うよ。ここをホームタウンにする人はスリルを常に求めてる人くらいじゃないか？」

あ、思い出した。12層つて用事が無ければ絶対行くなつて呼ばれ

てる層だけ。道理で周りの人が少ない訳だ。あれ?なんか聞き覚えの無い名前をレイトさんが言つてた。これから会う人なのかな?

「大体のトラップは思い出したし、行きますか」

私は、歩き出したレイトさんの後を追つことにした。

「到着・・・・」

疲れきったレイトさんの声を聞いて上を見上げると、一つの宿屋があつた。

結局、私が一回麻痺に、レイトさんが一回防具の耐久度を下げる酸を食らつた。レイトさんによれば、まだましな方だという・・・。レイトさんと一緒に中に入ると、中は意外と広かつた。隠れた名店のような、外から見たら余り気づかないが、中に入ると存在感があるような雰囲気だ。

レイトさんは1階の一一番奥にある部屋に着くと、その部屋の扉をノックした。

「開いてますよー」

中から、のんびりとした女の人の声が聞こえてきた。
レイトさんがそのまま扉を開けると、今度はさつきよりはっきり声が聞こえた。

「お久しぶりですね、先輩」

12層アノール（後書き）

初見殺しでアノール、作者が今はまつてるゲームが分かりますね。
あそこの大弓使いが厄介なんだよなあ・・・
感想とか待ってます！！

田舎とお菓子（前書き）

オリキヤ「盛場！！
なんか話が伸びてしまつた・・・。
では、どうぞ！」

「お久しぶりですね、先輩」

中にいたのは、かつてのパーティメンバーだった少女。

「久しぶり、レナ」

しつかり物のお姉さん、目の前の彼女を一目見て判断すると、そんな感じだろう。身長は俺より頭一個小さく、この世界で唯一自分で容姿を変えられる髪を、水色のロングヘアで伸ばしている。

「一体何の用だ? メッセージにもただ集まれとしか書いてなかつただろ? うが」

「集まれ、じゃなくて、集まれますか、ですよ。それじゃ、私が来るのを強制してみたといじやないですか」

「大差変わらんぢうが」

ひどいなーと言いながらも笑っている彼女は、昔からこうこう細かいところに心がこもるさー。それが、美点でもあり欠点でもあるのだが。

「立ち話もなんなんで、どうぞ」

レナが扉の前からどけて、中へと勧めてくる。レナの後に続きながら、扉を開けてから一言も喋っていないシリカを中に入れる。そしてようやくレナがシリカに気づいたようだった。

「ええっ…先輩がかわいい女の子連れてる…何時の間に…?」「やつと会ったのか。お前はいつも周囲の状況判断が…・・・

「先輩。犯罪はいけませんよ、こうこうのは両者の同意があつてこそ…・・・」

「違うからな…! 今の俺のパーティメンバーだから…」

レナといつもの応酬をする。いつももほんとに久しぶりだな・・・。

「なあんだ、早く言つてくださいよ。だから先輩は・・・」

「お前の勘違いだらうが。ちょっと話は話を聞け」

「でも、先輩がパーティねえ・・・。で、彼女は?」

今までの応酬についていけなくて、固まっていたシリカに向き直る。

「彼女はシリカ。さつきも言つたが俺の今のパーティメンバーだ。メンバーって言つても、俺とシリカしかいないけどな」

俺は《今の》といつとひを強調して言つた。

「シリカちゃんか、よろしくねーこんな先輩だけど根はいい人だと思つ・・・から」

「おー、何だその間は…せりて思つだけかよ…」

「いいやつと処理が追いついたシリカがはじめて口を開いた。

「あ、えっと、よろしくお願ひします。あの、レナさん？」

「私の名前はセレーナ。先輩が言つてゐるよつてレナでいこよーあと、敬語も私には付けなくていいよーー」

「そうだが、ここに敬うところなんて無いから

「ちょ、先輩、ひどー少しほ後輩に対する優しさって物があつても、レナの説明に茶々を入れつつ、話を元に戻そとするが・・・

「いやー、同年代の同姓つて中々いないからね。シリカは歳幾つ?」

「13ですけど。レナさんは?」

「私は14だよー。そだ、フレンド登録しよつか!」

等と女子一人で盛り上がりてしまって、どうにも戻りそうに無い。
といふか、話に混ざれない・・・。
しばらく混ざれそうにないので、俺はキッチンで何か作ることにした。

「なんか、菓子でも作つてくるからなー」

調理台に向かつて何を作るか考える。短時間で作れて、簡単に腹に入るものとなると・・・よし、決めた。材料は、『リトルリザードの爪』と『スクートホーンの粉』に・・・あれが足りないか。雑談している一人の元に戻り、レナに声をかける。

「レナ、倉庫に《虹彩放つ羽根》ないか？」

「《虹彩放つ羽根》？あつたと思つよ、ひょっと待つてて」

レナが倉庫にある方へと歩いていく。あれが無いと、何で代用するかな・・・

「そんな素材何に使うんですか？」

シリカが聞いてきた。まあ、羽は普通の素材アイテムだしな。

「何つて、調味料。甘さを出すにはあれが一番だと思つんだけど」

「甘さつて・・・素材に味があるんですね？」

「基本的に素材には全部味有るぞ？見た目が見た目なのは食べたこと無いけど・・・。ちゃんとした食材アイテムじやないから、それらで作つてもスキル値は上がらないけどな」

皿變じやないが、素材アイテムはほとんどのものを食べたことがある。ある程度は自分でも記憶しているし、今欲しい甘味は分かる。

「あつたよー。私たちの分もお願いしますね、先輩」

シリカと話しながら、レナが戻ってきた。彼女から材料を受け取り、レナに手を上げてながらキッチンに戻る。

まずは、爪を刷つて・・・それに粉を塗して・・・それで・・・5分位して、田当てのものができた。見た目も悪くないし、我ながらいい出来だと思つ。

簡単に皿に盛り付け、一人のところへ戻る。

「完成したぞ」

「ありがとうございます、先輩！さすが私たちの中で唯一、料理スキル持つてただけはありますね」

すぐにレナが待つてましたとばかりに食いついてきた。

「まあ、色々作られたからな。俺が作れないようなものまで、簡単に要求されたしな」

興味単位で作つてみたらよくできたから、レナにも渡そうと思つてここに持つてきたのがそもそもの原因だつたような。結局、いいほうに転んだからよかつたけどさ・・・

「それは『愁傷様』です。で、なに作つたんですか？」

「クッキーだ。短時間で作れるもので、俺が一番得意としているのはこれだつたからな」

「ふえ！？クッキーですか？」

シリカも興味津々になつて聞いてきた。現実世界では身近にあつたお菓子だけど、この世界では食べれないものだしな。

俺は、手についていた皿をテーブルに置いて、さらにアイテム欄にストックしてゐる飲み物を数種類出す。

「さて、召し上がり。飲み物は好きなの飲んでくれ」

俺たちは簡単なお茶会を始めた。

旧友とお菓子（後書き）

書き始めた頃は、レイトをこんなに料理上手にする飯はなかつたんだけどな・・・？

次からレイトの過去に触れていきます。
感想とか待ってます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2655v/>

剣の世界の銃使い

2011年11月13日22時16分発行